

松江市文化財調査報告書 第208集

大庭町宅地造成工事に伴う発掘調査報告書

## 下黒田遺跡2

令和4（2022）年3月

島根県松江市  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

大庭町宅地造成工事に伴う発掘調査報告書

しもくろだ  
**下黒田遺跡 2**



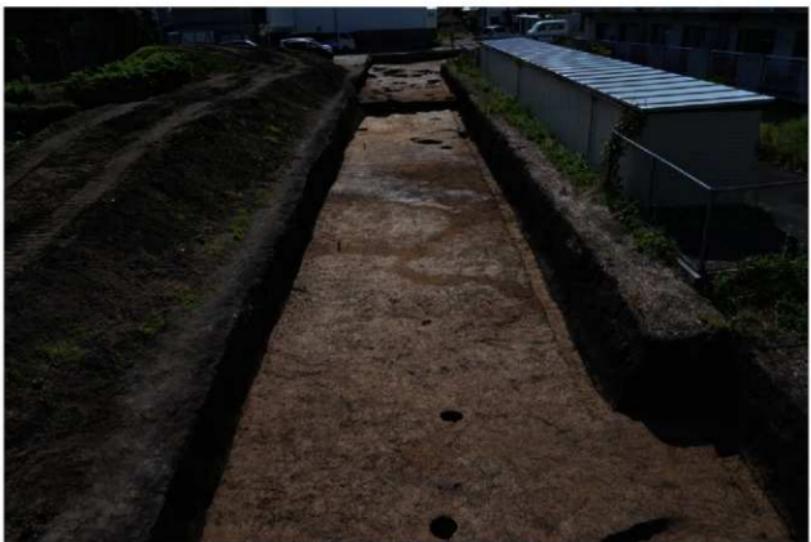
令和4（2022）年3月

島根県松江市  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団





1区西半完掘状況（西から）



1区東半完掘状況（東から）

巻頭図版 2



1区西半柱穴群検出・完掘状況（北東から）



1区据立柱建物跡（SB01・SB02）完掘状況（北東から）



2区南半遺構検出状況（南から）



2区遺構完掘状況（南から）



2区南端遺構（SX01～03、SD01・02）検出状況（東から）



同上完掘状況（東から）

## 例 言

- 本書は、令和3(2021)年度に本調査を実施した大庭町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 本報告書の作成は、令和3年度に株式会社ライズアークから松江市が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。
- 遺跡の名称・所在地は以下のとおりである。

名 称 下黒田遺跡

所在地 島根県松江市大庭町52番地5外

### 4. 現地調および報告書作成期間

現地調査 令和3(2021)年4月15日～令和3(2021)年6月15日

報告書作成 令和4(2022)年1月4日～令和4(2022)年3月31日

### 5. 開発面積及び調査面積

開発面積 2,330.47m<sup>2</sup>

調査面積 398.2m<sup>2</sup>(1区:352.7m<sup>2</sup>、2区:45.5m<sup>2</sup>)

### 6. 調査組織

依頼者 株式会社 ラインズアーク

主体者 松江市長 松浦正敬(～令和3年4月23日)、上定昭仁(令和3年4月24日～)

事務局 松江市歴史まちづくり部 部 長 松尾純一

" 次 長 井上雅雄

" まちづくり文化財課 課 長 尾添和人

" " 埋蔵文化財調査室 室 長 川上昭一

" " 調査係 係 長 川西 学

" " " " 主 幹 古藤博昭

" " " " 学芸員 三宅和子

" " " " 曜託 門脇誠也

調査指導 島根大学法文学部 教授 大橋泰夫

出雲弥生の森博物館 館長 花谷 浩

島根県教育庁 文化財課 企画員 稲田陽介

実施者 公益財団法人 松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 星野芳伸

" 埋蔵文化財課(係長兼務) 課長 宮本英樹

" " 調査係 調査員 小山泰生(調査担当者)

" " " 調査補助員 宇津直樹(現場)

" " " 調査補助員 建神結香子(報告書)

松江市歴史まちづくり部まちづくり文化財課埋蔵文化財調査室 調査係主任 徳永隆(報告書担当)

7. 調査に携わった発掘作業員

安達明男、井川智、大津進、加藤恵治、桑垣貴之、中村慎市、深津靖博、峯谷一雄

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・淨書および遺構の淨書は、以下のものが行った。

坂本玲子、角 優佳

9. 報告書作成にあたっては、以下の方からご指導・ご教示を頂いた。記して謝意を表する。

島根県埋蔵文化財調査センター 阿部賢治

10. 本書の執筆は、小山調査員の指導のもと、第2章及び第4章第3節を建神が、その他を徳永が執筆した。編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て徳永が行った。

11. 本文・図版中の表記に用いた遺構略号は次のとおりである。

SB:掘立柱建物跡 SK:土坑 SP:柱穴 SD:溝 SX:不明遺構

12. 本書の遺構番号は、調査時に設定したものを報告書作成にあたり一部変更している。

13. 本書で用いた方位は平面直角座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した平面直角座標系第Ⅲ系の値である。また、レベル高は海拔標高を示し、本文中では標高○mと記した。

14. 本書で用いた地層、出土遺物の色名は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に拠った。

15. 本書における土器区分、分類、編年は以下を参照した。

〔須恵器〕島根県教育委員会2013『史跡出雲国跡9-総括編-』

〔陶磁器〕中世土器研究会1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年-九州近世陶磁学会10周年記念-』

16. 訳（引用・参考文献等）は文末に掲載した。

17. 掲載した遺構図の縮尺は各図の縮率とスケールを配した。遺物実測図の縮率は原則1/3、須恵器の断面は黒塗り、灰釉陶器の断面は網掛け、そのほかは白ヌキで示した。

18. 本書に掲載した遺構図・遺物図はIllustratorCC2021・CS6(Adobe社)を用いて淨書し、図版レイアウト及び原稿執筆などの編集作業はInDesignCS6(Adobe社)を用いて行った。

19. 測量データ・出土遺物・実測図・写真等の資料は松江市で保管している。

# 目 次

卷頭図版

例 言

第1章 調査に至る経緯と経過 ..... 1

第2章 位置と環境 ..... 2

    第1節 地理的環境 ..... 2

    第2節 歴史的環境 ..... 2

第3章 試掘調査の成果 ..... 6

    第1節 調査概要 ..... 6

    第2節 調査成果 ..... 7

第4章 本調査の成果 ..... 11

    第1節 調査方法 ..... 11

    第2節 基本層序 ..... 11

    第3節 1区の調査 ..... 15

    第4節 2区の調査 ..... 24

第5章 総括 ..... 28

    第1節 遺構の時期と様相 ..... 28

    第2節 古代山陰道との関連の検討 ..... 30

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

|                                     |    |
|-------------------------------------|----|
| 第 1 図 調査地位置図                        | 1  |
| 第 2 図 周辺の遺跡分布図                      | 5  |
| 第 3 図 事業予定範囲および調査範囲図                | 6  |
| 第 4 図 試掘調査成果図(1)                    | 8  |
| 第 5 図 試掘調査成果図(2)                    | 9  |
| 第 6 図 試掘調査出土遺物実測図                   | 10 |
| 第 7 図 調査区とグリッド配置図                   | 12 |
| 第 8 図 1 区土層図                        | 13 |
| 第 9 図 2 区土層図                        | 14 |
| 第 10 図 掘立柱建物(SB01・SB02)平面・横断図       | 16 |
| 第 11 図 掘立柱建物(SB01・SB02)柱穴平面・断面図     | 17 |
| 第 12 図 掘立柱建物(SB01・SB02)出土遺物         | 18 |
| 第 13 図 土坑・柱穴遺構配置図                   | 19 |
| 第 14 図 1 区土坑平面・断面図                  | 20 |
| 第 15 図 1 区柱穴平面・断面図                  | 21 |
| 第 16 図 1 区土坑・柱穴群出土遺物                | 22 |
| 第 17 図 1 区遺構外出土遺物                   | 23 |
| 第 18 図 2 区遺構配置図                     | 24 |
| 第 19 図 2 区遺構(SD01～03、SX01～03)平面・断面図 | 25 |
| 第 20 図 2 区遺構外出土遺物                   | 27 |
| 第 21 図 試掘調査・本調査遺構時期別色分図             | 29 |
| 第 22 図 古代山陰道推定線と周辺の発掘調査及び道路状遺構配置図   | 31 |

## 挿表目次

|                    |    |
|--------------------|----|
| 第 1 表 試掘調査区一覧      | 7  |
| 第 2 表 1 区検出土坑・柱穴一覧 | 22 |

## 図版目次

|      |  |      |  |
|------|--|------|--|
| 巻頭 1 | 1 区西半完掘状況(西から)<br>1 区東半完掘状況(東から)                       | 図版 4 | 1 T4 完掘状況(北東から)<br>2 T4 井戸検出状況(北西から)   |
| 巻頭 2 | 1 区西柱穴群検出・完掘状況(北東から)<br>1 区掘立柱建物跡(SB01・SB02)完掘状況(北東から) | 図版 5 | 1 1 区西半完掘状況(南東から)<br>2 1 区中央完掘状況(南北から)   |
| 巻頭 3 | 2 区南半遺構検出状況(南から)<br>2 区遺構完掘状況(南から)                     | 図版 6 | 1 1 区東半完掘状況(東から)<br>2 1 区南壁土層断面(A-A) 東(北西から)   |
| 巻頭 4 | 2 区南端遺構(SX01～03、SD01・02)検出状況(東から)<br>同上完掘状況(東から)       | 図版 7 | 3 1 区南壁土層断面(A-A) 西(北西から)<br>1 掘立柱建物跡 SB01・SB02 完掘状況①(北西から)<br>2 掘立柱建物跡 SB01・SB02 完掘状況②(南東から) |
| 図版 1 | 1 調査前全景(南東から)<br>2 2 区調査前風景(北東から)                      |      | 3 SB01(柱穴 SP20)完掘状況(北から)<br>4 SB01(柱穴 SP27)半截状況(南から)   |
| 図版 2 | 1 T1 完掘状況(南から)<br>2 T1 SD01 検出状況(北東から)                 | 図版 8 | 1 SB01(柱穴 SP27)完掘状況(南から)<br>2 SB01(柱穴 SP39)半截状況(南東から)  |
| 図版 3 | 1 T2 完掘状況(南東から)<br>2 T3 完掘状況(南東から)                     |      | 3 SB01(柱穴 SP39)完掘状況(南東から)<br>4 SB01(柱穴 SP40)半截状況(南から)  |

|       |  |   |
|-------|--|---|
| 図版 9  | 1 SB01(柱穴 SP40) 完掘状況(南から)<br>2 SB02(柱穴 SP16) 半截状況(南から)<br>3 SB02(柱穴 SP16) 完掘状況(南から)<br>4 SB02(柱穴 SP18) 完掘状況(北から)<br>5 SB02(柱穴 SP22) 半截状況(南から)<br>6 SB02(柱穴 SP22) 完掘状況(南から)<br>7 SB02(柱穴 SP28) 半截状況(南から)<br>8 SB02(柱穴 SP28) 完掘状況(西から)<br>9 SB02(柱穴 SP28) 墓壁石(北から)<br>10 SB02(柱穴 SP38) 半截状況(東から)<br>11 SB02(柱穴 SP38) 遺物出土状況①(北東から)<br>12 SB02(柱穴 SP38) 遺物出土状況②(北東から) | 3 柱穴 SP23 半截状況(南から)<br>4 柱穴 SP23 完掘状況(南から)<br>5 柱穴 SP24、25 半截状況(東から)<br>6 柱穴 SP24、25 完掘状況(東から)<br>7 柱穴 SP26 完掘状況(北から)<br>8 柱穴 SP29 半截状況(南から)<br>9 柱穴 SP29 完掘状況(南から)<br>10 柱穴 SP30 半截状況(南から)<br>11 柱穴 SP30 完掘状況(南から)<br>12 柱穴 SP31 半截状況(南から)<br>13 柱穴 SP31 完掘状況(南から)<br>14 柱穴 SP32、33 半截状況(東から)<br>15 柱穴 SP32、33 完掘状況(東から)   |
| 図版 10 | 1 土坑 SK01 半截状況(南から)<br>2 土坑 SK01 完掘状況(南から)<br>3 土坑 SK02 半截状況(南から)<br>4 土坑 SK02 完掘状況(南から)<br>5 土坑 SK03、04 半截状況(東から)<br>6 土坑 SK03、04 完掘状況(南から)<br>7 土坑 SK05 完掘状況(西から)<br>8 土坑 SK06 半截状況(東から)<br>9 土坑 SK06 完掘状況(東から)<br>10 土坑 SK07 完掘状況(東から)<br>11 土坑 SK08 半截状況(南から)<br>12 土坑 SK08 完掘状況(南から)<br>13 柱穴 SP01 半截状況(南から)<br>14 柱穴 SP01 完掘状況(東から)<br>15 柱穴 SP02 半截状況(南から)  | 1 柱穴 SP34 半截状況(北から)<br>2 柱穴 SP34 完掘状況(北から)<br>3 柱穴 SP35 半截状況(南から)<br>4 柱穴 SP35 完掘状況(南から)<br>5 柱穴 SP36 半截状況(南から)<br>6 柱穴 SP36 完掘状況(南から)<br>7 柱穴 SP37 半截状況(東から)<br>8 柱穴 SP37 完掘状況(東から)<br>9 柱穴 SP41、42 半截状況(東から)<br>10 柱穴 SP41、42 完掘状況(東から)<br>11 柱穴 SP43 半截状況(南から)<br>12 柱穴 SP43 完掘状況(南から)<br>13 柱穴 SP44 半截状況(南から)<br>14 柱穴 SP44 完掘状況(南から)<br>15 柱穴 SP45 半截状況(南から) |
| 図版 11 | 1 柱穴 SP02 完掘状況(南から)<br>2 柱穴 SP03 半截状況(南から)<br>3 柱穴 SP03 完掘状況(南から)<br>4 柱穴 SP04 完掘状況(西から)<br>5 柱穴 SP05 半截状況(南から)<br>6 柱穴 SP05 完掘状況(南から)<br>7 柱穴 SP06 半截状況(西から)<br>8 柱穴 SP06 完掘状況(東から)<br>9 柱穴 SP07 半截状況(南から)<br>10 柱穴 SP07 完掘状況(南から)<br>11 柱穴 SP08 半截状況(南から)<br>12 柱穴 SP08 完掘状況(南から)<br>13 柱穴 SP09 半截状況(南から)<br>14 柱穴 SP09 完掘状況(南から)<br>15 柱穴 SP10 半截状況(南から)        | 1 柱穴 SP45 完掘状況(南から)<br>2 柱穴 SP46 半截状況(南から)<br>3 柱穴 SP46 完掘状況(南から)<br>4 柱穴 SP47 半截状況(南から)<br>5 柱穴 SP47 完掘状況(南から)<br>6 柱穴 SP48 半截状況(南から)<br>7 柱穴 SP48 完掘状況(南から)<br>8 柱穴 SP49 半截状況(南から)<br>9 柱穴 SP49 完掘状況(南から)<br>10 2区完掘状況(北から)   |
| 図版 12 | 1 柱穴 SP10 完掘状況(南から)<br>2 柱穴 SP11 半截状況(南から)<br>3 柱穴 SP11 完掘状況(南から)<br>4 柱穴 SP12 半截状況(南から)<br>5 柱穴 SP12 完掘状況(南から)<br>6 柱穴 SP13 半截状況(南から)<br>7 柱穴 SP13 完掘状況(南から)<br>8 柱穴 SP14 半截状況(南から)<br>9 柱穴 SP14 完掘状況(南から)<br>10 柱穴 SP15 半截状況(南から)<br>11 柱穴 SP15 完掘状況(南から)<br>12 柱穴 SP17 半截状況(南から)<br>13 柱穴 SP17 完掘状況(南から)<br>14 柱穴 SP19 半截状況(北から)<br>15 柱穴 SP19 完掘状況(北から)        | 1 2区南端部遺構検出状況(北東から)<br>2 2区南端部遺構完掘状況(北東から)  |
| 図版 13 | 1 柱穴 SP21 半截状況(南から)<br>2 柱穴 SP21 完掘状況(南から)   | 1 溝状遺構 SD01、SD02 検出状況(東から)<br>2 溝状遺構 SD01、SD02 完掘状況(東から)  |
| 図版 14 |  | 1 溝状遺構 SD01、SD02 土層堆積状況(東から)<br>2 溝状遺構 SD03 完掘状況(東から)   |
| 図版 15 |  | 1 不整形土坑 SX01～03 検出状況(東から)<br>2 不整形土坑 SX01～03 完掘状況(東から)  |
| 図版 16 |  | 1 不整形土坑 SX01 半截状況(南から)<br>2 不整形土坑 SX01 完掘状況(東から)<br>3 不整形土坑 SX02 半截状況(南から)<br>4 不整形土坑 SX02 完掘状況(東から)<br>5 不整形土坑 SX03 半截状況(南から)<br>6 不整形土坑 SX03 完掘状況(東から)<br>7 柱穴 SP50 完掘状況(東から)<br>8 柱穴 SP51 完掘状況(東から)  |
| 図版 17 |  | 試掘調査出土遺物<br>1 区出土遺物<br>2 区出土遺物  |
| 図版 18 |  |   |
| 図版 19 |  |   |
| 図版 20 |  |   |
| 図版 21 |  |   |
| 図版 22 |  |   |



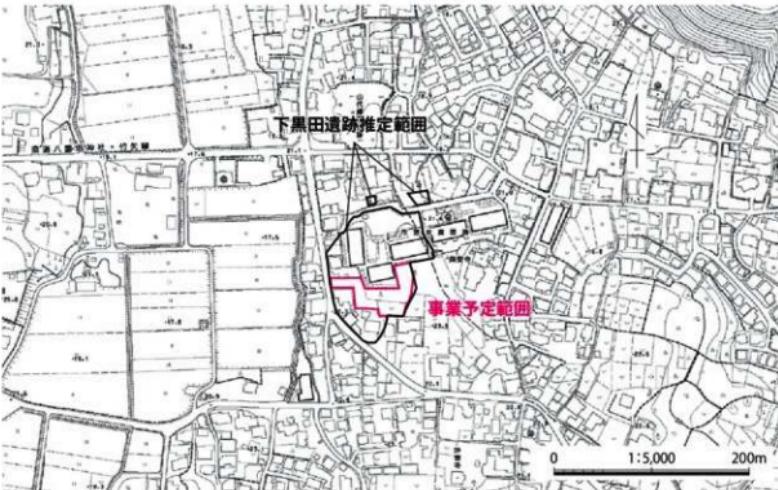
# 第1章 調査に至る経緯と経過

当該遺跡は、市営大庭第1住宅建替工事事業に伴い実施した昭和61(1986)年の調査で発見され、同年には発掘調査が実施された。この調査では、古代の掘立柱建物跡の他、北側に所在する山代郷正倉跡の南辺を区画すると考えられる溝跡が検出されるなどの貴重な発見があった。また、この遺跡の隣接地で実施した平成2(1990)、26(2014)、30(2018)年度の試掘調査により、その都度遺跡の範囲が広がっている。

この下黒田遺跡の周知範囲とそれに隣接する未調査地部分において、民間事業者による宅地造成工事が計画された。これを受け、令和元(2019)年8月に試掘調査を実施した結果、未調査地部分を含めて事業地全体に遺跡が広がることが確認でき、遺跡の範囲変更に関する事務手続きを行った。なお、当該箇所は古代山陰道の推定地としても知られる場所であり、試掘調査において溝状遺構が確認され、古代道に伴う重要遺構の存在が危惧されたことから、県教育委員会と島根大学大橋教授に現地指導を受け、本調査の成果を受けて判断すべきとの見解を得ている。

以上の経緯を踏まえ、事業者と協議した結果、当初予定通り宅地造成にかかる発掘の届出が提出され、これに対し県教育委員会から、遺跡に影響が及ぶ道路新設部と擁壁設置部分の一部については、発掘調査の指示が通知されたことから、令和3(2021)年4月から発掘調査を実施したものである。

なお、調査終了後、島根県教育委員会と協議し、古代山陰道の推定線部分は基本的に地下保存されることや、その他現地保存すべき重要遺構も検出されなかったことから、本調査を実施した範囲については記録保存することとなった。



第1図 調査位置図

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

下黒田遺跡は、島根県松江市の市街地南郊の大庭町下黒田に所在する。字名「下黒田」は本遺跡から北東へ広がる。本遺跡は、意宇平野の北西端にあたり、『出雲国風土記』に「神名樋野」と記載されている茶臼山（標高 171.5m）から西方に約 500m 離れた地点に位置する。遺跡の立地は、茶臼山の西に広がる標高 20 ~ 25m の乃木段丘（島根県 1974）と呼ばれるなだらかな河成段丘地帯の一角にあたる。この段丘は、赤褐色のローム層の上に黒灰色の大山や三瓶山の噴火による火山灰土が堆積する土壌の形成となっている。丘陵の西側には、幅 200m 程の南北に細長い谷が、神魂神社麓側から延びて、北側の馬渕川から形成した狭い谷につながっている。また、東・南側には意宇川が形成した扇状地が開いている。

なお、当地域は松江地区を代表する大型古墳が集中しており、出雲地域最大規模の前方後方墳である山代二子塚古墳をはじめ、山代方墳や大庭鶴塚古墳が分布する。

また、本遺跡北側の丘陵上に、山代郷正倉跡が隣接しており、下黒田遺跡（昭和 62 年度調査）や黒田畦遺跡、黒田館跡などの官衙関連遺跡が集中する場所となっている。本遺跡周辺の寺院は山代郷北新造院（来美庵寺）や山代郷南新造院（四王寺跡）がある。本遺跡の南東には意宇川の下流域に発達する小規模な沖積平野である意宇平野が広がり、そこには出雲国府が、その北東に出雲国分寺などが所在し、古代出雲的一大拠点であったことが窺える。

なお、当地は、「出雲国風土記」に記された古代山陰道の推定線上に位置することが当初から注意される場所であった。

### 第2節 歴史的環境（第3図）

ここでは下黒田遺跡を中心とした意宇平野周辺の遺跡について、時代ごとに概要を述べる。

**旧石器時代** 本遺跡周辺で旧石器時代の良好な遺跡は知られていないが、下黒田遺跡の昭和 62 年度調査(1) で玉髓製石核と剥片が、市場遺跡(16) で黒曜石製細石核、山代郷北新造院跡（来美庵寺）(86) で玉髓製ナイフ形石器の出土が確認されている。

**縄文時代** 意宇平野北側に、石斧や縄文時代後期の磨消縄文土器、石器が出土した才塚遺跡(67)、縄文時代後期～晩期の土器が多く出土した上小紋遺跡(66) が所在する。また、馬橋川中流域でも、石台遺跡(93) から縄文時代後期～晩期の土器が多く出土した。

**弥生時代** 意宇平野中央に位置する出雲国府跡(94) では、弥生時代前期の土坑や前期後半から中期前葉の土器が出土している。意宇平野の北側には、弥生時代前期～中期の溝状遺構や土坑を確認した布田遺跡(72)、弥生時代中期から後期初頭の堅穴建物を確認した大坪遺跡(53)、弥生時代後期の水田を確認した上小紋遺跡、向小紋遺跡(65)、夫敷遺跡(73) が所在している。また、大庭小学校から北西に延びる微高地に、弥生時代中期の溝状遺構や貯蔵穴を確認した大庭小原遺跡(39)、柱穴を確認した砂口遺跡(40) が所在する。この更に西方に位置する大庭北原遺跡(41) からは、弥生時代後期の堅

穴建物を確認した。本遺跡周辺では、後期の竪穴建物が確認された出雲国造館跡(49)や同時期の溝状遺構が検出された柳塙遺跡(19)が所在する。また、茶臼山北東丘陵部では、来美墳墓(83)や間内越墳墓群(79)などの四隅突出型墳丘墓が築かれる。

**古墳時代** 古墳時代前期では、茶臼山裾に広がる丘陵上に廻田古墳群(80)が築かれ、古墳時代中期～後期には本遺跡周辺に大型古墳が築造される。古墳時代後期の首長墓と想定される山代二子塚古墳(36)や山代方墳(37)、造り出し付方墳である大庭鶴塚古墳(35)、山代原古墳(38)、「額田部臣」の銘文が刻まれた円頭大刀が出土した岡田山1号墳(51)、石棺式石室である向山1号墳(32)、前方後円墳の東淵寺古墳(22)などが所在する。

横穴墓では、本遺跡北部の茶臼山裾に広がる丘陵上に十王免横穴墓群(81)と狐谷横穴群(84)、意宇川を挟んだ西の低丘陵地に安部谷横穴群(63)など石棺式石室の形態を模倣した大規模な横穴群が点在している。

集落遺跡では、大庭小原遺跡で前期の、砂口遺跡で中期の竪穴建物が検出された。茶臼山裾に位置する山代沖田遺跡(15)では、土師器を作う竪穴建物を確認した。また、大庭鶴塚古墳の南に広がる谷底平野の水田地帯には溝状遺構を確認した茶臼遺跡(34)や柳塙遺跡が所在する。なお、水田地帯西側の丘陵には、須恵器が出土する散布地のB3遺跡(24)、B8遺跡(29)、B9遺跡(26)、B10遺跡(27)、B11遺跡(30)、B12遺跡(31)、B18遺跡(21)、B21遺跡(20)が点在する。

**古代（奈良・平安時代）** 本遺跡周辺の官衙遺跡としては、出雲國府跡(94)、山代郷正倉跡(4)がある。出雲國府跡の調査では、大型建物跡や規則的に配置された掘立柱建物が検出され、硯や木簡、墨書き土器などが出土している。さらに、平成11(1999)年の調査では、国司館や官営工房と考えられる遺構・遺物が検出されている。茶臼山南西の段丘上に位置している山代郷正倉跡からは、規格的に配置された縦柱建物群と多量の炭化米が検出された。この山代郷正倉跡を囲む大溝が下黒田遺跡（昭和61年度調査）と黒田館跡(3)で見つかっている。正倉跡の南に位置する下黒田遺跡からは、正倉跡の南辺を区画すると考えられる陸橋を作り幅3～3.6mの東西大溝と掘立柱建物が検出されている。正倉跡の東に位置する黒田館跡からは、東辺を区画すると考えられる南北大溝が検出された。

寺院としては、意宇平野の北に出雲国分寺(71)や中国分尼寺(75)が建立され、茶臼山を挟んだ北と南にそれぞれ山代郷北新造院（来美庵寺）と山代郷南新造院（四王寺跡）(18)が所在する。また、これら寺院にかかる瓦窯跡が、出雲国分寺瓦窯跡(76)や小無田Ⅱ遺跡(14)で確認されている。

この他、本遺跡周辺には、加工段内の平坦面で掘立柱建物を確認した大庭原ノ前遺跡(6)や奈良平安～中世初頭の約300基に及ぶ粘土採掘坑を確認した川原宮Ⅱ遺跡(7)、東西方向に規則的に並んで、1.5～4m大のいびつな楕円形を呈する土坑10基が検出された黒田畦遺跡(10)が所在する。黒田畦遺跡の土坑の多くは廃棄土坑とされているが、完形の土器がまとまって出土した1基については祭祀関係のものと考えられている。遺物は、墨書き土器「云石」、甕、製塙土器などが出土している。

本遺跡の南西側に位置する、川原宮Ⅲ遺跡(8)と外屋敷遺跡(23)では道路遺構が検出されている。川原宮Ⅲ遺跡の道路遺構は切り通し状の東西道で、下端幅は約5.0mあり、路床からは波板状凹凸面が検出された。この道路遺構を西側に延長すると、川原宮Ⅱ遺跡の南端あたりを通る。外屋敷遺跡の道

路遺構は、幅4.0mの東西道で、両側に連続土坑状の掘方をもつ側溝を備えている。路面は後世の削平により残存せず、波板状凹凸面は確認されなかった。なお、外屋敷遺跡の道路遺構については、島根県東部の古代山陰道の推定ルートから、古代山陰道（正西道）または古代山陰道に並走する準幹線路の可能性が指摘されている。

**中世以降** 出雲国府のあった意宇平野一帯は、中世には「出雲府中」と呼ばれるようになり、中世出雲府中に関わる遺跡が平野と周辺部に点在している。

茶臼山南西麓には中世の遺跡が数多く分布しており、本遺跡周辺に、山代郷正倉跡（平成4年度調査区）(5)、出雲国造館跡、小無田遺跡(13)、山代郷南新造院跡、黒田館跡、黒田畦遺跡、市場遺跡、下黒田II遺跡(9)の8遺跡などが所在する。

山代郷正倉跡（平成4年度調査区）では、13～14世紀の建物跡が復元されており、12世紀の白磁や13世紀の青磁がまとまって出土している。出雲国造館では、北側に東西方向の14世紀に埋められた堀状の大溝が、その南西に東西方向の近世の堀状の大溝が検出され、屋敷内には、建物、廃棄土坑、井戸が確認されている。この大溝は中世から近世にかけて拡張したと考えられている。また、南宋から輸入された白磁や青磁片が大量に出土しており、付近に強大な実権をもつ豪族の居館があったことが推定される。小無田遺跡では、中世以降の建物や土坑が検出され、14～15世紀代と考えられる中国製青磁、16世紀代の陶器が出土している。山代郷南新造院跡からは、14～16世紀代のものと推定される中国製青磁・石硯・石鍋が出土している。下黒田遺跡の昭和62年度調査では、15世紀後半の備前焼の壺を半壊して、その中に羽般・土師器皿・人毛・和鏡・銭貨を埋納した地鎮に関わる土坑が見つかっている。本遺跡に隣接する黒田館跡では、15世紀後半から16世紀にかけての館跡と考えられる土塁や堀、掘立柱建物が検出され、遺物は白磁や青磁のほか朝鮮陶器の紛青沙器が出土している。黒田畦遺跡では、溝で囲まれた建物と柵列が、その20m東に15～16世紀の土坑墓6基が長軸を揃えて検出されており、この木簡墓の中には古錢が約100枚出土したものもある。市場遺跡では、15～16世紀代の中国製の青磁・染付や、漬戸・備前などの陶磁器が出土し、これと同時期と考えられる建物も検出された。下黒田II遺跡では、掘立柱建物や溝、土坑が検出され、遺物は17世紀初めの土坑から陶器が出土している。

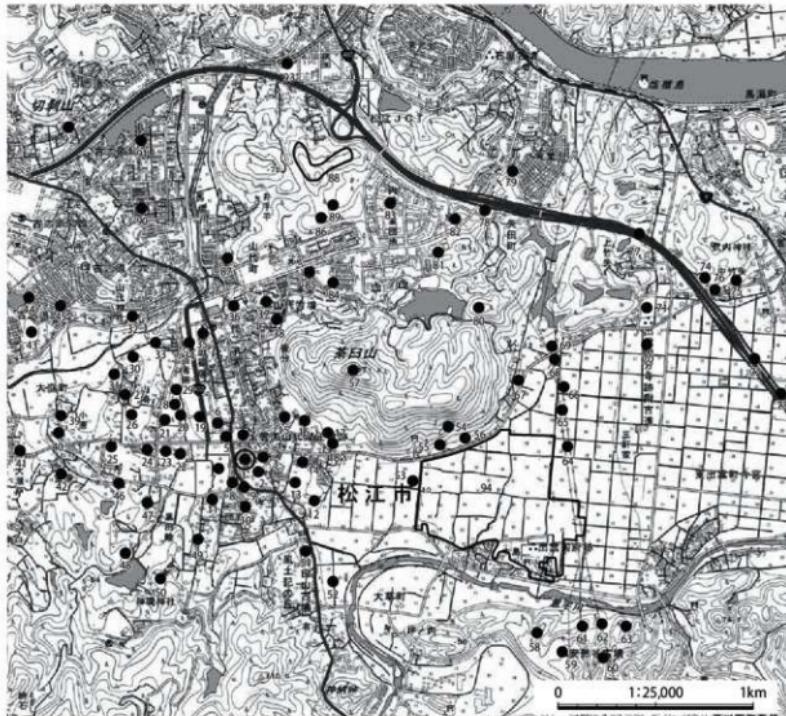
また、意宇平野の周縁部の遺跡として、12～13世紀の意宇川南岸の谷部を埋めて造られた掘立柱建物や柵が検出され、貿易陶磁器や国産陶磁器、中世須恵器が大量に出土した天満谷遺跡(62)や意宇川を挟んだ西側の低丘陵地に位置し、貿易陶磁器が出土した12世紀の建物と14世紀の火葬墓を検出した中竹矢遺跡(74)が所在する。茶臼山の北丘陵を下った馬橋川の下流付近に位置する石台遺跡では、北側の丘陵から流れてきたと思われる12～13世紀の貿易陶磁器や国産陶器などが出土している。

中世の山城として、茶臼山城跡(57)がある。この山城は、茶臼山の最高所に主郭を持ち、内部に大きく5つに分けられる曲輪が存在し、東西に大きな堀切を設け、山の斜面には連続堅堀群がある。

また、川原宮III遺跡・大庭原ノ前遺跡・柳堀遺跡・大庭小原遺跡などでは江戸時代の遺構・遺物が検出されている。

## 参考文献

- 鳥根県 1974年『土地分類基本調査松江』  
 鳥根県教育委員会 1981年『史跡出雲国山代郷正倉跡』  
 鳥根県教育委員会 2016年『柳原遺跡・茶臼遺跡・川原宮II遺跡』  
 鳥根県教育委員会 2019年『川原宮III遺跡』  
 鳥根県教育委員会 2020年『下黒田II遺跡』  
 松江市教育委員会 1988年『下黒田遺跡発掘調査報告書』  
 松江市教育委員会・公益財團法人松江市スポーツ振興財团 2016年『外屋敷遺跡』



|              |              |               |              |             |               |              |
|--------------|--------------|---------------|--------------|-------------|---------------|--------------|
| 1. 下黒田遺跡     | 14. 小無田II遺跡  | 28. B 2 B 8遺跡 | 42. 空原遺跡     | 56. 聖源遺跡    | 70. 出雲國分寺跡附古道 | 84. 長谷禪六窟    |
| 2. 団原遺跡      | 15. 山代郷田遺跡   | 29. B 8 遺跡    | 43. 向山西遺跡    | 57. 茶臼山城跡   | 71. 出雲國分寺跡    | 85. 鎮合遺跡     |
| 3. 黒田遺跡      | 16. 市場遺跡     | 30. B 1 1 遺跡  | 44. 香ノ木池遺跡   | 58. 西百尋山古墳群 | 72. 仁和遺跡      | 86. 山代郷北斬通院跡 |
| 4. 山代郷正倉跡    | 17. 内堀五塚群    | 31. B 1 2 遺跡  | 45. 向山西古墳    | 59. 東百尋山古墳群 | 73. 天香遺跡      | 87. 井出平山古墳群  |
| 5. 山代郷茶臼遺跡   | 18. 桜井町新町跡   | 32. B 1 3 遺跡  | 46. 大石城跡     | 60. 大石城船古墳  | 74. 中竹矢塚跡     | 88. 鹿島山古墳    |
| 6. 大庭原ノ原遺跡   | 19. 稲葉跡      | 33. 下ノ原遺跡     | 47. 秋上東古墳    | 61. 大庭原遺跡   | 75. 仁和寺分尼寺跡   | 89. 鹿島山古墳遺跡  |
| 7. 大庭原ノ原遺跡   | 20. B 2 1 遺跡 | 34. 清口遺跡      | 48. 大石城下群    | 62. 天満古道跡   | 76. 出雲國分寺瓦窯跡  | 90. 雄石堤ノ遺跡   |
| 8. 川原宮II遺跡   | 21. B 1 8 遺跡 | 35. 大庭跡塚古墳    | 49. 出雲國分寺跡   | 63. 安部山塚穴群  | 77. イノツノ遺跡    | 91. 雄石堤II遺跡  |
| 9. 下黒田I遺跡    | 22. 東羽寺古墳    | 36. 山代二子塚古墳   | 50. 大石古墳群    | 64. 四隅古道跡   | 78. 平所遺跡      | 92. 古志原遺跡    |
| 10. 黒田遺跡     | 23. 外野遺跡     | 37. 山代方塚      | 51. 同前田I 1号墳 | 65. 向小牧遺跡   | 79. 内越塚墓羣     | 93. 石台遺跡     |
| 11. 神須御社参道遺跡 | 24. B 3 遺跡   | 38. 山代古墳      | 52. 岩屋後古墳    | 66. 上小牧遺跡   | 80. 亂田古墳群     | 94. 出雲國府跡    |
| 12. 团原古墳     | 25. 大庭小学校校庭跡 | 39. 大庭小原遺跡    | 53. 大坪遺跡     | 67. 才塚古墳    | 81. 十三免塚穴羣    |              |
| 13. 小無田遺跡    | 26. B 9 遺跡   | 40. 砂口遺跡      | 54. 大谷遺跡     | 68. 大平古跡    | 82. 寺山小田遺跡    |              |
|              | 27. B 1 0 遺跡 | 41. 大庭北原遺跡    | 55. 真名井遺跡    | 69. 間内遺跡    | 83. 來妻塚墓      |              |

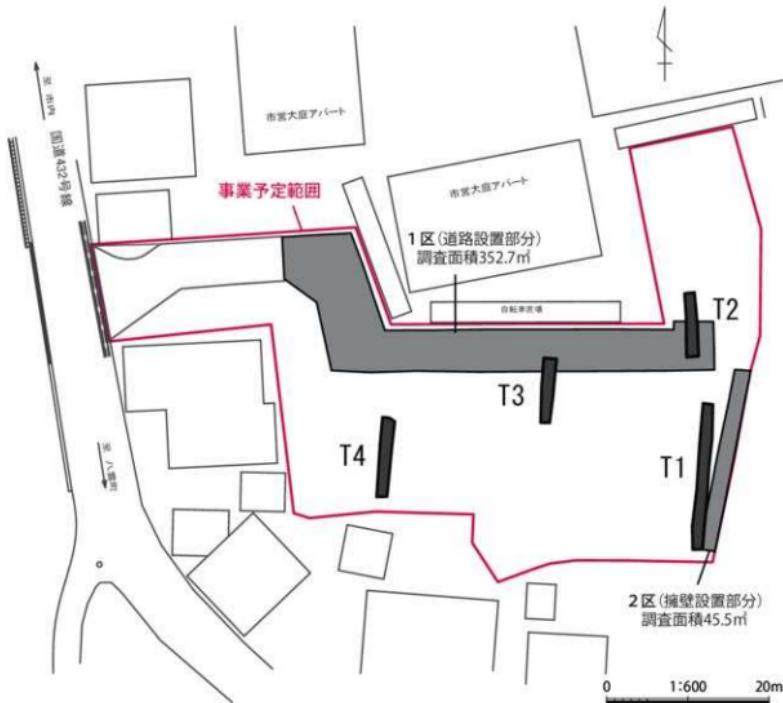
第2図 周辺の遺跡分布図

## 第3章 試掘調査の成果

### 第1節 調査概要（第3図）

今回、当該遺跡においては宅地造成工事が計画されたものであるが、主な工事内容は、宅地部分の盛土、団地内の進入道路の新設、擁壁設置であった。しかし、当該事業予定地においては、遺跡の残存状況や深さなど、詳細には把握できていなかったため、工事に対する遺跡への影響を検証することができなかつた。このことから、遺跡の範囲の確認及び、その残存状況や現況地盤からの深さなどを事前に把握するため、4箇所のトレンチ（T1～T2）を設定して試掘調査を実施した。なお、当該地は古代山陰道の推定線上に位置することから（第5章参照）、保護すべき重要な遺構として道路遺構が残存する可能性も視野に入れ、東西方向に延びると想定される道路遺構に掛かる様にトレンチを配置している。

結果、遺構密度は希薄で、遺物も須恵器片と近世陶磁器がわずかに出土した程度ではあったが、T1トレンチでは古代道の側溝の可能性が想定される東西方向の溝跡（SD01）と、他のトレンチ



第3図 事業予定範囲および調査範囲図

でも柱穴や近世初頭の井戸跡が検出され、遺跡の範囲と深さが確認できた。このことから、永久構築物である道路新設範囲（以下「1区」と記す。）と、遺跡の深さまで掘削が及ぶ事業予定地南東部の擁壁設置範囲（以下「2区」と記す。）について、本調査を要すると判断したものである。

## 第2節 調査成果

### 【T1調査区(1.2m×18m)】(第4図)

事業予定地の南東側に設置した調査区である。

表層の耕作土（第1層）を35～60cm程度剥ぎ取ると、直下で黄褐色土の地山（第3層）が確認された。地山はほぼ平坦ながらわずかに北に向けて下るもので、耕作の影響で東西方向に延びる歎の凹凸が見られた。この地山上面、調査区の南側において東西に延びる溝状遺構（SD01）を検出した。溝の長さは調査区外に延びるため不明であるが、幅約50cm、深さ約20cmで、黒色土（第2層）を埋土とし、断面形状は箱掘状になっている。遺物は、上層耕作土との境界付近で陶磁器片が出土しているものの、明確に埋土中からの遺物は確認できなかった。

なお、その他調査区内からの遺物についても、耕作土中で近世以降の陶磁器片が確認されたのみであった。

### 【T2調査区(1.2m×8m)】(第4図)

事業予定地の北東側に設置した調査区である。

表層の擾乱層及び耕作土（第1、2層）を50～65cm程度剥ぎ取ると、漸移層の第3層を挟んで黄褐色土の地山（第4層）が確認された。地山はほぼ平坦であるが、T1調査区同様に耕作の影響で所々凹凸が見られた。この地山上面で、調査区の南側において柱穴2個（本調査報告のSP47、48）を検出した。いずれも直径が25cm程度の小型のもので、深さは25cm程度であった。

遺物は出土しなかった。

### 【T3調査区(1.2m×8m)】(第5図)

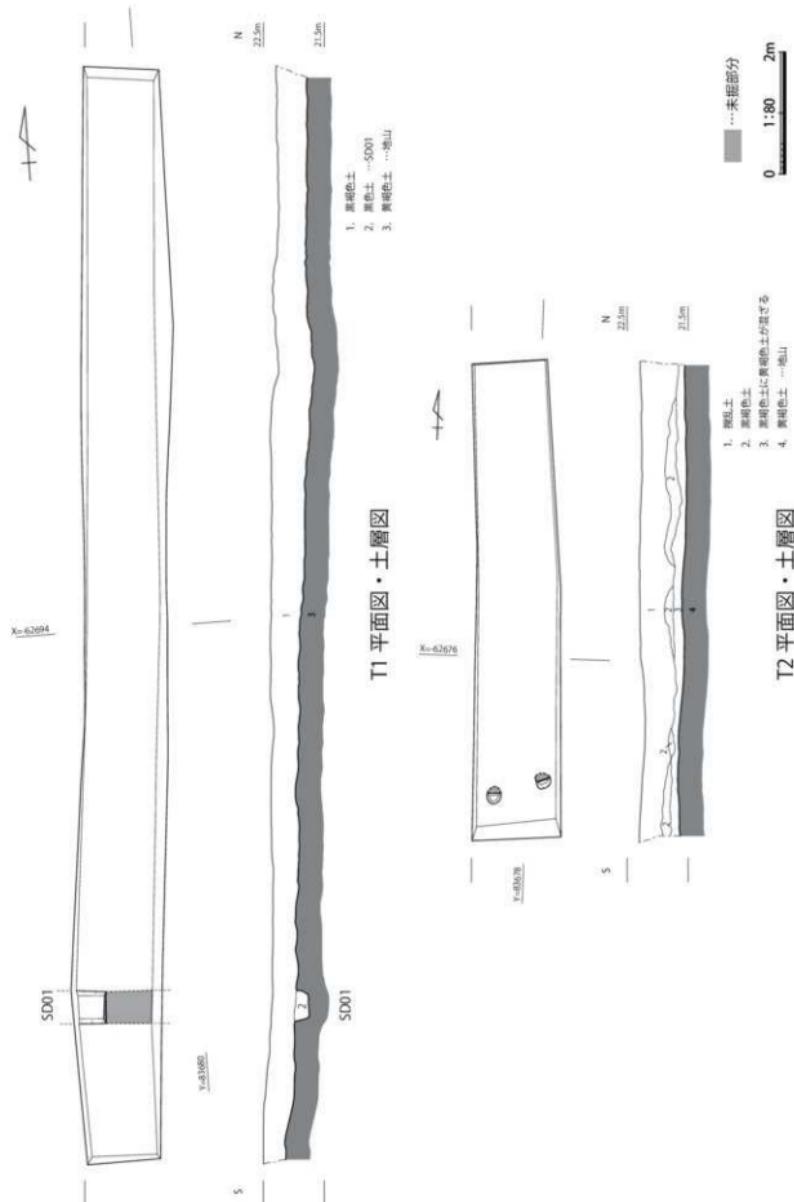
事業予定地の中央北側に設置した調査区である。

土層堆積状況はやや表層の擾乱層が厚いものの、ほぼT2調査区と同様で、現地表面下約1mで黄褐色の地山（第4層）を検出した。地山はほぼ平坦であるが、所々凹凸が激しく、上面を精査したが遺構は検出されなかった。

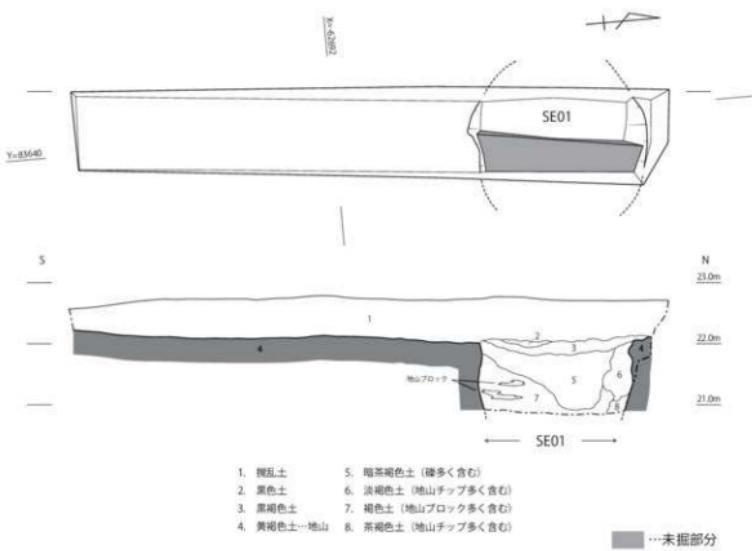
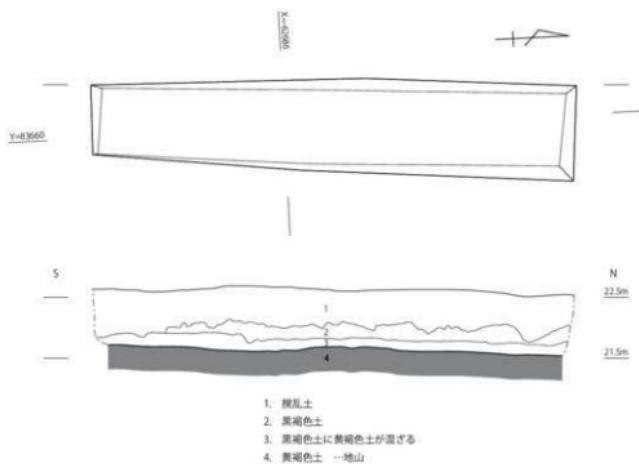
なお、遺物は耕作土中から近世遺構の陶磁器片が数点出土したのみである。

第1表 試掘調査区一覧

| トレンチ | 現況<br>(調査前) | トレンチ<br>設定方向 | 設定範囲<br>(長軸×短軸) | 調査面積                | 掘削深度  | 検出遺構 | 出土遺物 |
|------|-------------|--------------|-----------------|---------------------|-------|------|------|
| T1   | 畠地          | 北～南          | 1.2m×18.0m      | 21.60m <sup>2</sup> | 60cm  | 溝状遺構 | 陶磁器  |
| T2   | 畠地          | 北～南          | 1.2m×8.0m       | 9.60m <sup>2</sup>  | 65cm  | 柱穴   | 遺物無し |
| T3   | 畠地          | 北～南          | 1.2m×8.0m       | 9.60m <sup>2</sup>  | 100cm | 遺構無し | 陶磁器  |
| T4   | 畠地          | 北～南          | 1.2m×10.0m      | 12.0m <sup>2</sup>  | 70cm  | 井戸跡  | 陶磁器  |



第4図 試掘調査成果図(1)



T4 平面図・土層図

0 1:80 2m

第5図 試掘調査成果図(2)

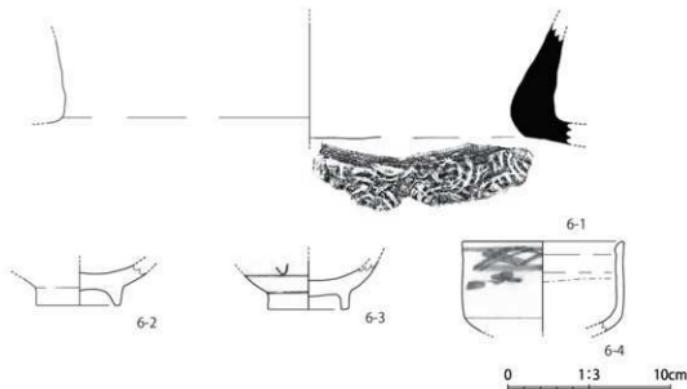
## 【T4 調査区(1.2 m × 10 m)】

事業予定地の南東寄りに設置した調査区である。

表層の耕作土(第1層)を35~70cm程度剥ぎ取ると、黄褐色土の地山(第4層)が確認された。他の調査区同様、地山はほぼ平坦であったが、この上面の調査区北側において井戸跡(SE01)を検出した。SE01は、東西端が調査区外に及ぶため全容は不明であるが、堀方のほぼ中央を検出したものと推察され、直径約3mの円形のものと考えられる。深さは、現地表面から1.9m、地山から1.2m掘り下げたが底面に至らず、さらに深いものと推察された。

このSE01埋土内からは、第6図に示す遺物が出土した。以下、遺物について概要を述べる。6-1は須恵器甕の頸部付近である。頸部の復元直径が30cm程度ある大型のもので、胴部内面には青海波紋がみられる。6-2は透明釉が施された陶器碗の底部片である。「呉器手碗」と呼ばれるもので、九陶編年Ⅲ期(1650~1690年)に属すると考えられる。6-3は白濁釉が施された磁器碗の底部片で、外面に網目文の染付が描かれる。いわゆる初期伊万里で、九陶編年Ⅱ・Ⅲ期(1630~1650年代)に属するものと考えられる。6-4は透明釉が施された陶胎染付片で、火入もしくは香炉の胴部である。外面には斜格子文と草花文が描かれ、九陶編年Ⅲ期(1650~1690年)に属すると考えられる。この他、陶磁器の小片も出土しているが、概ね17世紀後半に属する遺物であることから、SE01は当該時期には埋没したものと推察される。なお、近接する「下黒田Ⅱ遺跡」でも近世の井戸跡が2個(井戸140、173)検出されている(註1)。同じく直径3m程度の円形のもので、同丘陵の近接する箇所に多数の井戸が掘られた様子が窺える。

また、当トレンチからは、SE01以外の遺構は検出されなかった。このことから、T1トレンチで検出したSD01が、古代道にかかる長大な遺構であるとすれば、トレントのさらに南側の事業予定地境界付近に存在する可能性や、SE01により部分的に消失している可能性が考慮される。いずれにせよ、当該トレントにおいては古代道の有無を確定付ける成果は得ることはできなかった。



第6図 試掘調査出土遺物実測図

## 第4章 本調査の成果

### 第1節 調査方法（第7図）

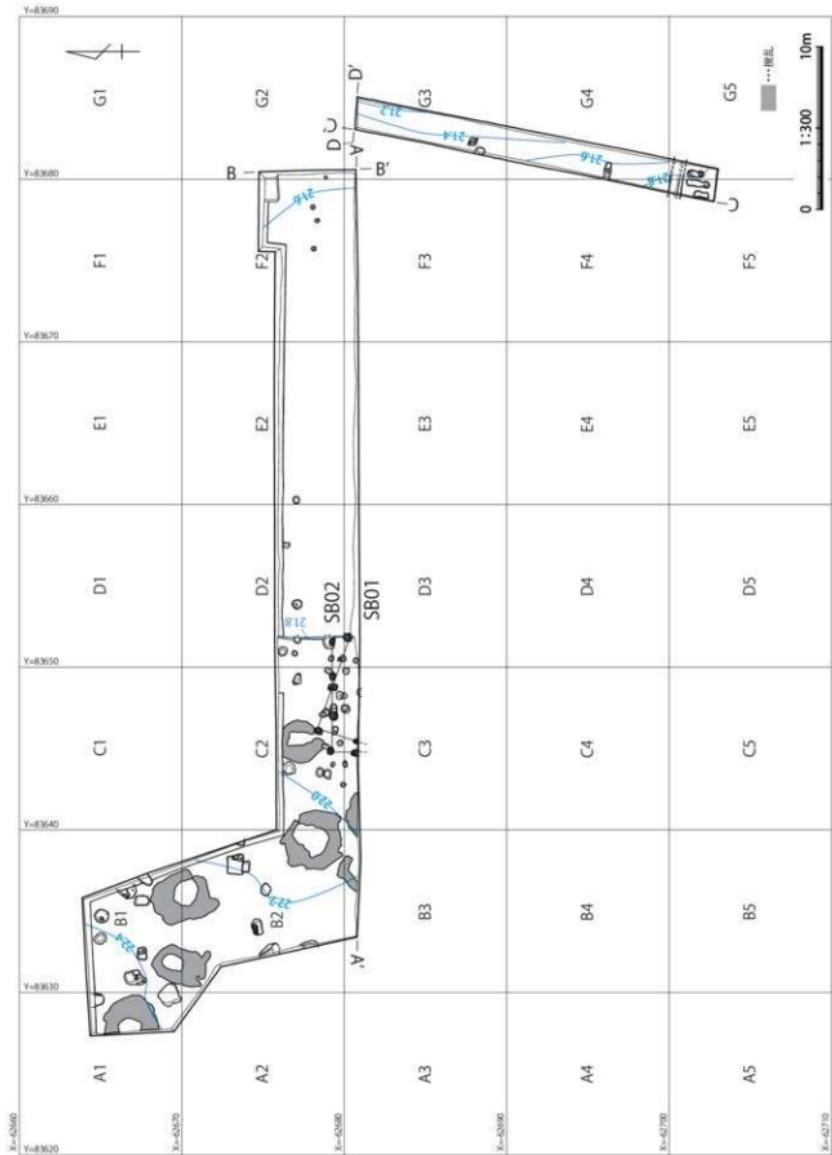
調査は、まず前章で述べた道路予定地の1区（352.7m<sup>2</sup>）と、擁壁設置予定地の一部である2区（45.5m<sup>2</sup>）の調査区を設定した後、平面直角座標系第Ⅲ系に基づく10m四方のグリッドを設定し、遺構の位置関係の把握及び遺物の取り上げに等に用いた。グリッドは、北西角（X=-62,660m、Y=83,620m）を基点とし、横軸はX座標軸、縦軸はY座標軸に平行とした。列番号は基点から東に向かってアルファベット順、行番号は南に向かってアラビア数字順に付し、各区画は列・行の順にそれぞれの番号を繋ぎ呼称した。

遺構面までの掘削方法については、表層の耕作土は、1区・2区ともに重機掘削により除去し、以下の遺構面までの掘削は人力により行った。なお、1区中央部分については、遺構面が耕作等の影響で混濁とし（地山の漸移層）、遺構も疎らで判然としなかったことから、明確な地山面まで掘り下げたため、一部遺構面に段差が生じている。遺構検出については、遺構面上面を大まかに鋤籠等で整地した後、草刈りを用いて精査を行った。遺構の掘り下げは、基本的に移植ゴテを用い、遺物の検出にも注意を払った。また、遺構は半截を行い、土層の堆積状況の把握に務めた。

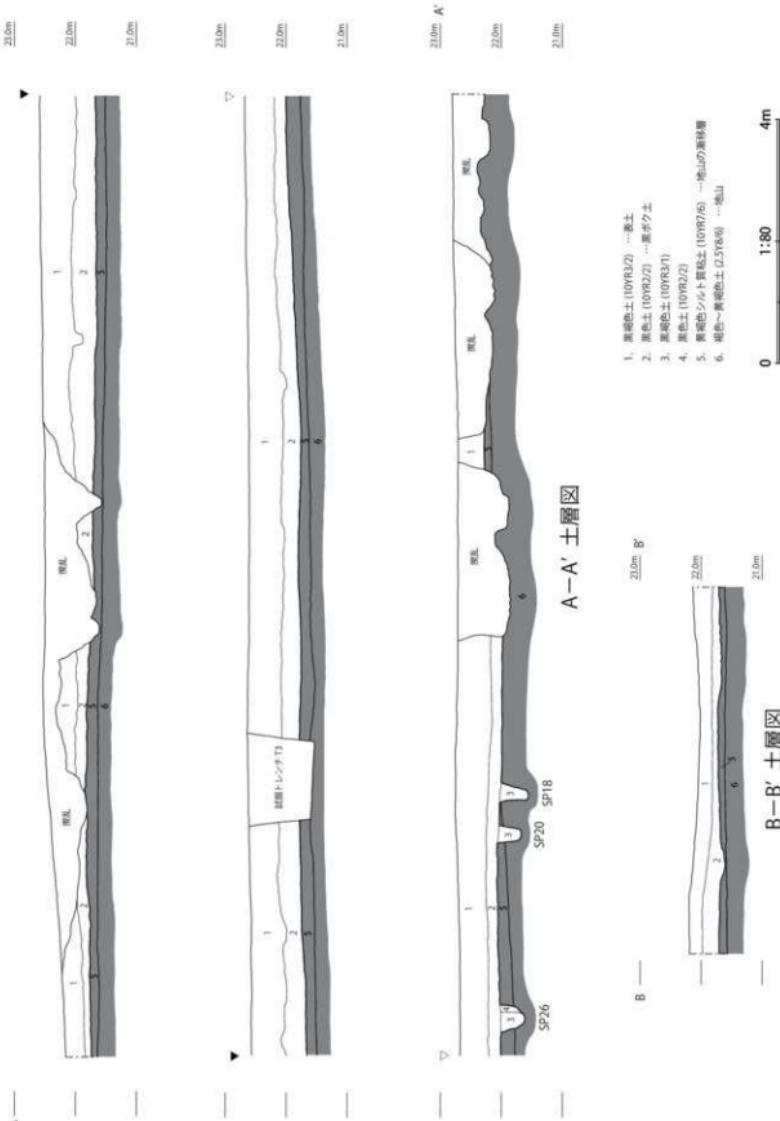
遺構の記録方法については、平面図は、電子平板ソフトを用いて作成した測量図を基に、20分の1の縮尺でマイラー方眼紙に描き記し、レベルを用いて標高値を付した。土層断面図についても、レベルを用いて標高値に基づき、20分の1の縮尺でマイラー方眼紙に描き記した。また、土層図に記した土色については、新版標準土色帖に基づいて記録した。遺構の写真については、基本的にデジタル一眼レフカメラ（NikonD3300）と、リバーサルの35mmフィルムカメラを併用し、重要と判断したものは中判カメラ（6×7判）によりリバーサルの120mmフィルムで撮影した。

### 第2節 基本層序（第7、8図）

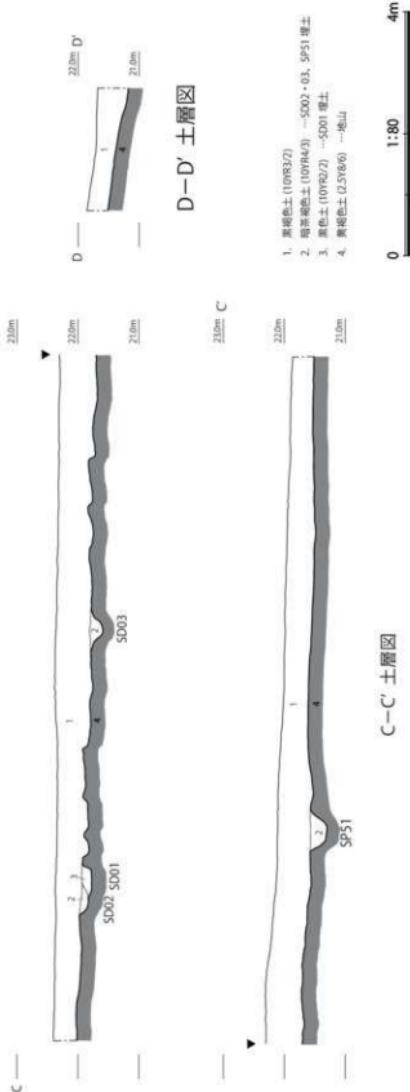
調査の現況は、標高22mから23m程度のほぼ平坦な畠地で、わずかに東に向かって傾斜して下る地形である。表層は一部攪乱が見られるものの、全体に50cm前後の黒褐色を呈する柔らかい土壌（第1層）が覆っており、近現代の遺物も多く含むことから、比較的最近まで耕作が行われていたものと考えられる。この耕作土下層において、1区の大半部分で黒色土（第2層）の堆積が確認された。土質は、いわゆる「黒ボク」と呼ばれる火山灰と腐植物を成因とするもので、本来は縄文時代以前の堆積層と考えられる（註2）。なお、『出雲國風土記』の黒田駅条に、「郡家の西北二里に黒田村あり、土体の色黒し。故、黒田と云う。」との記載があり、当該遺跡周辺が「下黒田」、「黒田」、「黒田畦」の字名があることから、ここが風土記記載の「黒田村」に比定できると考えられている（註3）。「土体の色黒し」とは、この黒ボク層に由来すると考えられ、当時の当該地周辺の地表を覆っていたものと推察される。ただし、当調査地においては、この黒ボク層は小片ながら須恵器片等を含み、近世の遺構もこの下面から検出されたことから、耕作の影響を受けたか、あるいは客土された可能性も考えられる。次に、この黒色土下層は、本来は褐色～黄褐色の地山（第6層）が検出されるものであるが、



第7図 調査区とグリッド配置図



第8図 1区南壁土層図



上層からの植物による侵食等の影響で、この地山が黒色に濁る漸移層（第5層）が見られた。ただし、黒色土層及び漸移層については、1区の西端や2区では検出されておらず、耕作土直下に地山が検出されている。現地表面から地山までが比較的浅い範囲であり、黒色土層から漸移層までが削平、または流失した可能性が考えられる。

遺構は、地山の漸移層（第5層）及び、これが無い範囲では第6層上面で検出された。この遺構面は、現況地盤同様、ほぼ平坦で、東に向かって緩やかに傾斜して下るもので、標高は21.2～22.5m程度である。ただし、2区がある東辺部では、耕作により周囲より深く削られており、2区ではさらに東西方向の歓跡も確認できた。

遺構については全体に希薄で、擾乱も多い状態であった。幾つかの耕作や削平の影響も考慮される。

第9図 2区西壁土層図

## 第3節 1区の調査

### 第1項 遺構の概要

1区は、事業範囲の北側にあたる宅地の道路設置部分に設定した調査区で、調査面積は352.7m<sup>2</sup>である。調査の結果、遺構は1区中央、西側に集中しており、東側ではほとんど検出されなかった。また、1区中央の一部で地山の漸移層を掘り下げ過ぎてしまい、その範囲の遺構の検出面が漸移層下面となっている。

確認できた範囲では、土坑8個と柱穴49個を検出した。検出された柱穴49個の中で2棟の掘立柱建物跡が復元できた。なお、U字又はO字の大型の土坑が検出された。近現代の遺物を含む搅乱であるが、平面形が不定形で底面に複数の凹凸があり近現代の植栽痕と考えられる。

遺物については、ほとんどの遺構が遺物を伴わないものであったが、掘立柱建物SB01を構成する柱穴から土師器と須恵器の破片が、掘立柱建物SB02を構成する柱穴から土師器と陶器の破片が出土した。出土遺物から掘立柱建物SB01の時期は8世紀中頃～後半、掘立柱建物SB02の時期は17世紀前半を想定している。

### 第2項 掘立柱建物跡

#### 掘立柱建物 SB01

##### ①遺構（第10・11図）

SB01は調査区西側のC2・D2グリッドに位置し、標高21.8～21.9mで検出した掘立柱建物跡で、SP20・SP27・SP39・SP40で構成される。上述した4個の柱穴は、深さに差異があるものの、ほぼ等間隔に並び、埋土の土色もほぼ同じであるため掘立柱建物として復元した。SP20より南側は調査外となるため梁行の正確な構造は不明だが、1間以上の規模をもつ。検出した範囲での規模は、桁行2間、梁行1間以上の構造で、桁行6.0m、梁行2.4m以上である。柱間の心々距離は桁行2.72～3.40m、梁行2.46mを測る。建物の主軸方位は東西で、E-20°-Sである。

柱穴は円形や楕円形を呈し、径28～52cmを測る。柱穴の深さは40～60cmで、埋土は黒褐色土と黒色土が堆積する。SP39では柱痕跡を確認し、埋土中から土師器と須恵器が出土している。

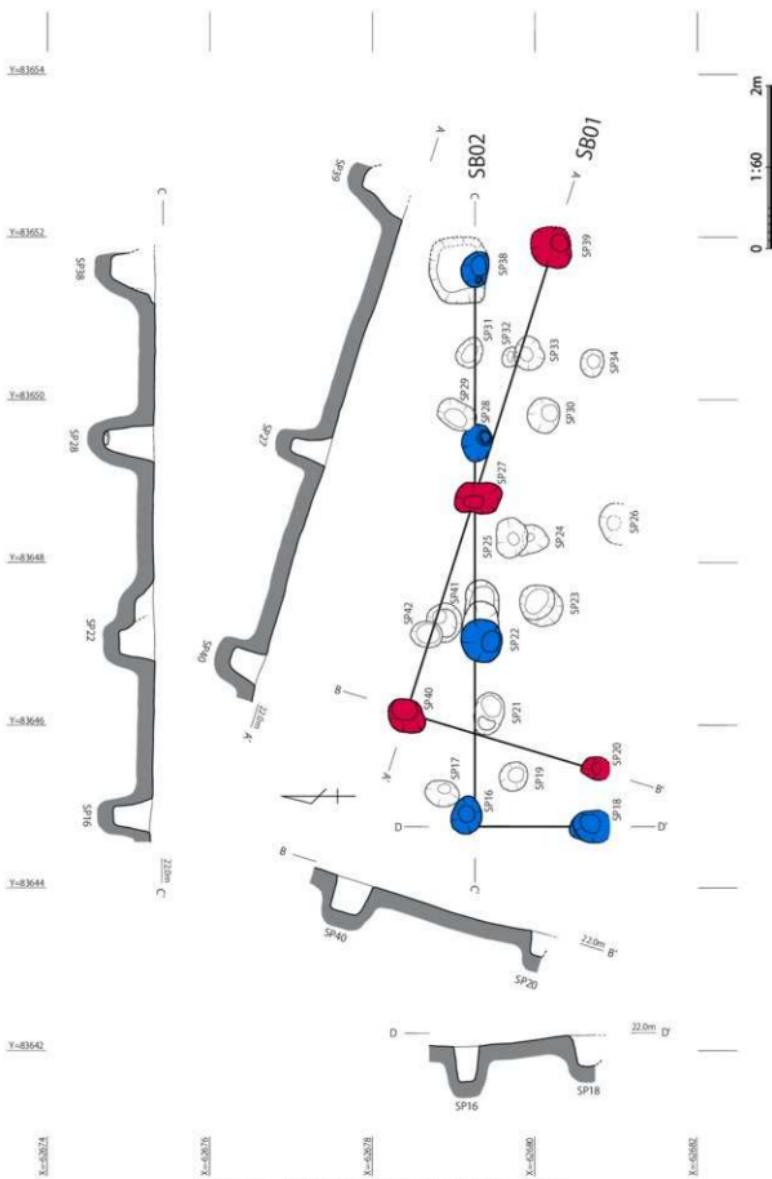
##### ②出土遺物（第12図）

SB01を構成するSP39内から摩滅した小片であるが、遺物が2点（12-1・2）出土した。12-1は土師器で無高台壺の底部である。調整は底部に回転糸切痕があり、時期は出雲国府第4型式（8世紀第3～第4四半期）に該当する。12-2は須恵器の甕片で、内外面にタタキが施されている。出土遺物からSB01の時期は8世紀中頃～後半を想定している。

#### 掘立柱建物 SB02

##### ①遺構（第10・11図）

SB02は調査区西側のC2・D2グリッドに位置し、標高21.8～21.9mで検出した掘立柱建物跡で、



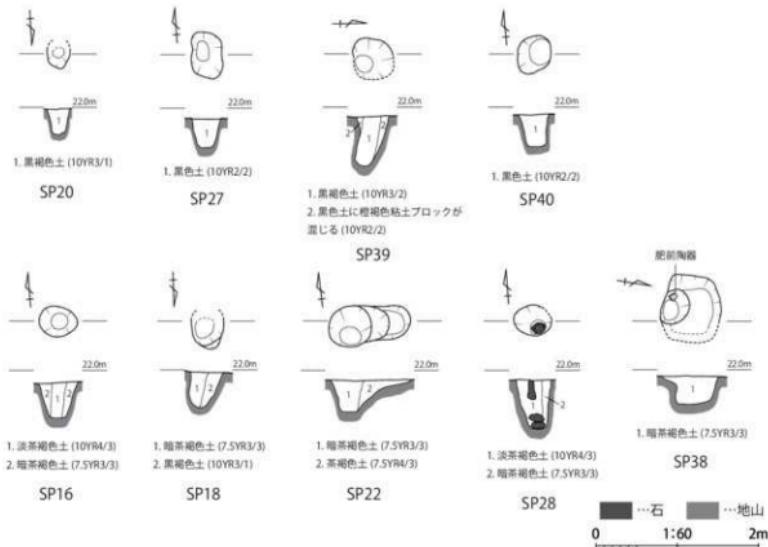
第10図 掘立柱建物 (SB01 + SB02) 平面・横断図

SP16・SP18・SP22・SP28・SP38で構成される。上述した5個の柱穴は、深さに差異があるが、ほぼ等間隔に並び、埋土の土色もほぼ同じであるため掘立柱建物として復元した。SP18より南側は調査外となるため梁行の正確な構造は不明だが、1間以上の規模をもつ。検出した範囲での規模は、桁行3間、梁行1間以上の構造で、桁行7.20m、梁行1.78m以上である。柱間の心々距離は桁行2.14～2.48m、梁行1.56mを測る。建物の主軸方位は東西の正方位である。

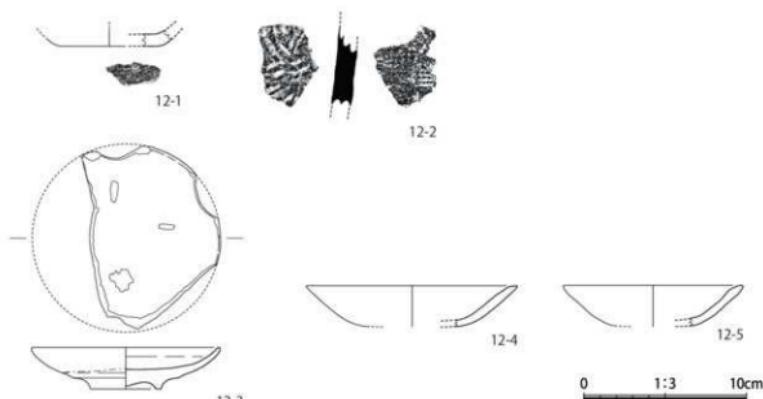
柱穴は円形や楕円形を呈し、径34～52cmを測る。柱穴の深さは38～61cmで、埋土は淡茶褐色土と暗茶褐色土、黒褐色土が堆積する。SP16・SP18・SP28では柱痕跡を確認した。また、SP28では石が3個検出された。礎盤石を2個重ねて柱穴の上方に裏込石を置いている構造である。SP38については、平面形が隅丸方形の柱穴を充分に検出できなかったため、二つの柱穴の切り合いは判然としないが、規模と深さからSB02を構成する柱穴は楕円形の柱穴と判断した。

## ②出土遺物（第12図）

SB02を構成するSP38内から遺物が3点（12-3～5）出土した。12-3は肥前系陶器の胎土目皿で、内面に3箇所の目痕が残る。調整は、内外面に灰釉が施されており、体部下方から高台は無釉である。九陶編年Ⅱ期（1610～1650年代）に相当する。12-4・5は京都系の手づくね成形された土師器皿で、同一個体の可能性があるが、口縁端部の厚みから別個体とした。12-5は内外面に油煙痕があるため、灯明皿と考えられる。時期は17世紀前半。以上の出土遺物から掘立柱建物SB02の時期は17世紀前半を想定している。



第11図 掘立柱建物（SB01・SB02）柱穴平面・断面図



第12図 挖立柱建物(SB01・SB02)出土遺物

### 第3項 土坑・柱穴群

ここでは1区で検出された土坑・柱穴群の概要と出土遺物について詳述する。(規模と埋土、出土遺物は22頁第2表に記載している。)なお、土坑・柱穴群については、検出時の印象で遺構名を分けたが、形状は混然として性格を明瞭に分けるものとはならなかった。しかし、ここでは混乱を避けるため、調査時に設定した番号付けに則り区別して記述する。

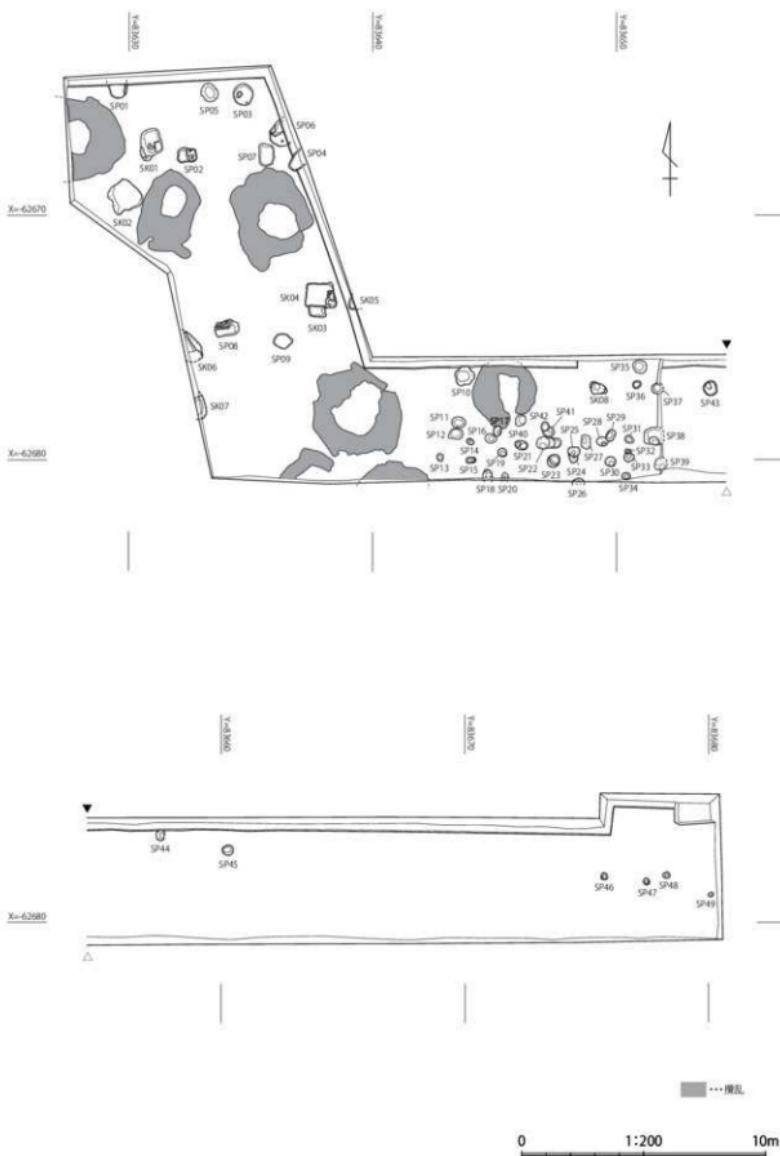
#### 土坑群 (SK01～08) (第13・14図)

1区西側のA1・B1・B2・C2グリッドに位置し、標高22.18～22.40mで8基の土坑が検出された。形状や深さから搅乱と判断されるものを除いた土坑の概要を説明する。平面形は隅丸方形や楕円形を呈し、規模は長軸43～126cm、短軸45～98cmを測る。断面形は浅い皿状やU字状を呈し、深さ6～43cmを測る。埋土は1層～2層で淡茶褐色土や暗茶褐色土、黒褐色土が堆積する。SK03は、北側をSK04と切り合って検出され、新旧関係は、この切り合いからSK04よりも古い土坑と考えられる。出土遺物については、SK03で陶器皿と擂鉢の破片が出土し、SK03についてのみ時期を18世紀前半と想定できる。その他の土坑は遺物が出土しておらず性格や時期は不明である。

#### 柱穴群 (SP01～49) (第13・15図)

1区のB1・B2～F2グリッドに位置し、標高21.50～22.40mで柱穴が49基検出された。1区西側、東側に点在し多くが中央に集中する柱穴群である。

掘立柱建物跡を構成する柱穴と形状や深さから搅乱と判断されるものを除いた柱穴群について説明する。柱穴は円形や楕円形を呈し、径18～80cmを測る。柱穴の深さは7～57cmで、埋土は主に淡茶褐色土や暗茶褐色土、黒褐色土が堆積する。SP30では柱痕跡を確認した。SP24は、北側をSP25



第13図 土坑・柱穴遺構配置図

と切り合って検出され、新旧関係は、この切り合いからSP25よりも古い柱穴であると考えられる。また、SP32は、北側をSP33と切り合って検出され、新旧関係は、この切り合いからSP33よりも新しい柱穴であると考えられる。出土遺物については、詳細を後述するが、SP02で須恵器片、SP25で土師器片が出土しており、SP25については時期を17世紀前半と想定できる。

この柱穴群は掘立柱建物を構成する柱穴と規模にほとんど相違がないが、擾乱と混在し、間隔・規模・深さが一定ではないため、掘立柱建物は想定できず、建物構築時の足場穴等の可能性が考えられるが性格は判然としない。

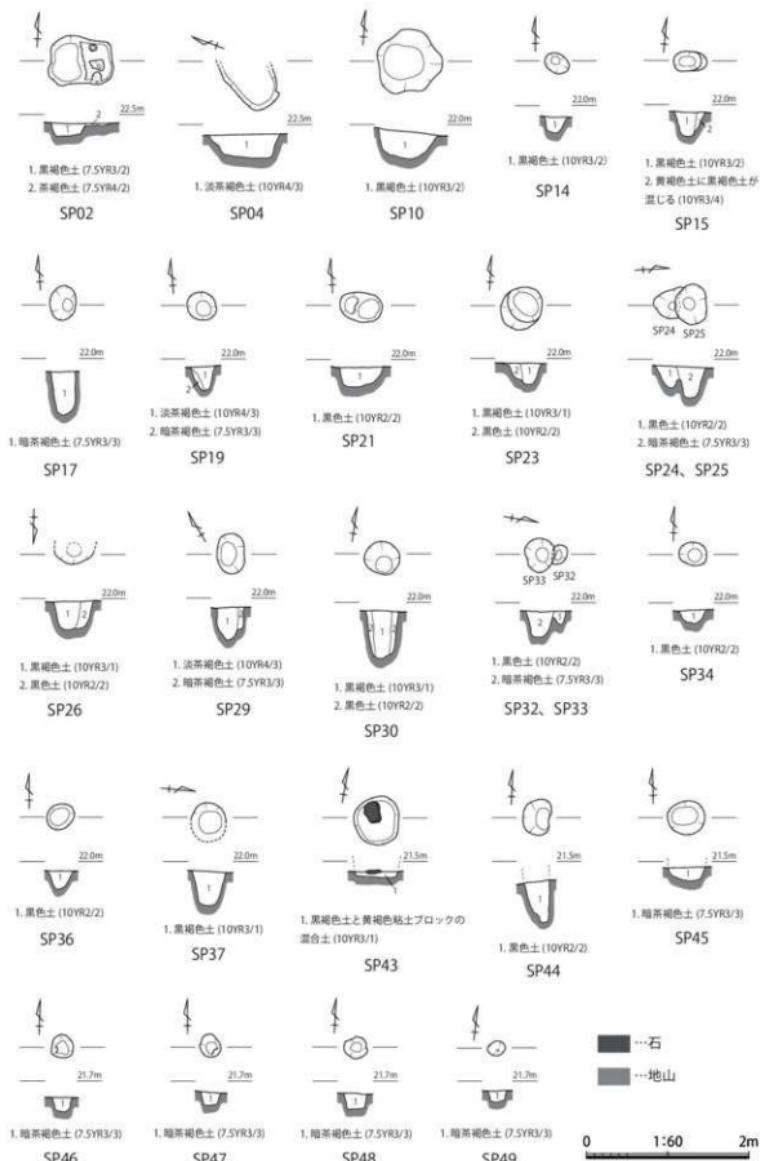
### 土坑・柱穴群出土遺物（第14図）

土坑群の遺物は、SK03から5点（16-1～3、外小片で実測不能の陶器片1、磁器片1）出土している。SK06内で瓦片が出土しているが、近世以降の遺物のため、図化していない。柱穴群の遺物は、SP02から2点（16-4・5）、SP25から2点（16-6、小片で実測不能の土製品）出土している。

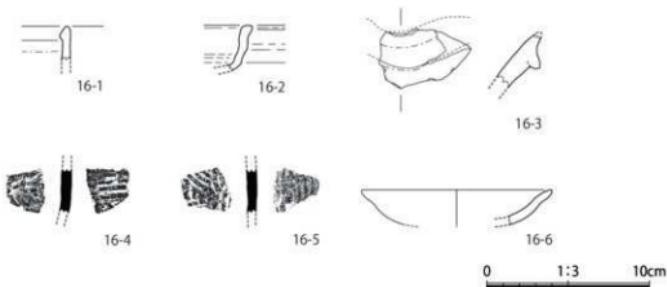
16-1は陶器の火入である。内外面に灰釉が施されており緑灰色を呈する。18世紀前半～中葉に相当する。16-2は在地系陶器の鉢の口縁部で、内外面に灰釉が施されている。16-3は備前播鉢の注口である。18世紀前半に相当すると考えられる。16-4・5は須恵器の表片でいずれも脇部である。外面には格子目タタキがされ、内面にもタタキが施されている。16-6は京都系の手づくね成形された土師器皿の口縁部である。17世紀前半に相当する。以上からSK03の時期は18世紀前半、SP25の時期は17世紀前半と想定される。



第14図 1区土坑平面・断面図



第15図 1区柱穴平面・断面図



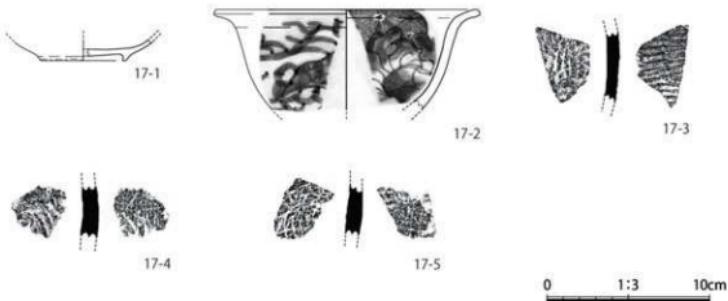
第16図 1区土坑・柱穴群出土遺物

第2表 1区検出土坑・柱穴一覧

| 土坑   | 規模         |            |            | 埋土    | 出土遺物・備考    |  |  |
|------|------------|------------|------------|-------|------------|--|--|
|      | 長軸<br>(cm) | 短軸<br>(cm) | 深さ<br>(cm) |       |            |  |  |
| SK01 | 133        | 86         | 14         | 淡茶褐色土 | 無し・攪乱      |  |  |
| SK02 | 132        | 120        | 13         | 暗茶褐色土 | 無し・攪乱      |  |  |
| SK03 | 68         | 45         | 9          | 淡茶褐色土 | 図16-1～3、小片 |  |  |
| SK04 | 120        | 98         | 6          | 黒褐色土  | 無し         |  |  |
| SK05 | 43         | —          | 21         | 暗茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SK06 | 126        | —          | 22         | 暗茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SK07 | 92         | —          | 26         | 暗茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SK08 | 75         | 48         | 43         | 黒褐色土  | 無し         |  |  |
| 柱穴   | 規模         |            |            | 埋土    | 出土遺物・備考    |  |  |
|      | 長軸<br>(cm) | 短軸<br>(cm) | 深さ<br>(cm) |       |            |  |  |
| SP01 | 72         | —          | 10         | 茶褐色土  | 無し・攪乱      |  |  |
| SP02 | 64         | 58         | 16         | 黒褐色土  | 図16-4、5    |  |  |
| SP03 | 88         | 82         | 20         | 黒褐色土  | 無し・攪乱      |  |  |
| SP04 | —          | 52         | 28         | 淡茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SP05 | 76         | 70         | 18         | 黒褐色土  | 無し・攪乱      |  |  |
| SP06 | 104        | —          | 10         | 黒褐色土  | 無し・攪乱      |  |  |
| SP07 | 92         | 60         | 12         | 黒褐色土  | 無し・攪乱      |  |  |
| SP08 | 100        | 60         | 8          | 淡茶褐色土 | 無し・攪乱      |  |  |
| SP09 | 80         | 63         | 7          | 淡黒褐色土 | 無し・攪乱      |  |  |
| SP10 | 80         | 67         | 32         | 黒褐色土  | 無し         |  |  |
| SP11 | 56         | 44         | 16         | 黒褐色土  | 無し・攪乱      |  |  |
| SP12 | 57         | 42         | 12         | 黒褐色土  | 無し・攪乱      |  |  |
| SP13 | 32         | 27         | 8          | 黒褐色土  | 無し・攪乱      |  |  |
| SP14 | 29         | 23         | 20         | 黒褐色土  | 無し         |  |  |
| SP15 | 41         | 24         | 30         | 黒褐色土  | 無し         |  |  |
| SP16 | 46         | 38         | 44         | 淡茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SP17 | 43         | 32         | 53         | 暗茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SP18 | —          | 39         | 38         | 淡茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SP19 | 36         | 25         | 28         | 淡茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SP20 | —          | 28         | 29         | 黒褐色土  | 無し         |  |  |
| 柱穴   | 規模         |            |            | 埋土    | 出土遺物・備考    |  |  |
|      | 長軸<br>(cm) | 短軸<br>(cm) | 深さ<br>(cm) |       |            |  |  |
| SP21 | 52         | 36         | 23         | 黒色土   | 無し         |  |  |
| SP22 | 100        | 50         | 44         | 暗茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SP23 | 52         | 50         | 26         | 黒褐色土  | 無し         |  |  |
| SP24 | —          | 34         | 26         | 黒色土   | 無し         |  |  |
| SP25 | 49         | 37         | 37         | 暗茶褐色土 | 図16-6、小片   |  |  |
| SP26 | 48         | —          | 34         | 黒褐色土  | 無し         |  |  |
| SP27 | 52         | 38         | 47         | 黒色土   | 無し         |  |  |
| SP28 | 45         | 38         | 61         | 淡茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SP29 | 50         | 34         | 40         | 淡茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SP30 | 43         | 40         | 57         | 黒褐色土  | 無し         |  |  |
| SP31 | 39         | 30         | 14         | 黒色土   | 無し・攪乱      |  |  |
| SP32 | 24         | —          | 16         | 黒色土   | 無し         |  |  |
| SP33 | 42         | 36         | 31         | 暗茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SP34 | 34         | 28         | 16         | 黒色土   | 無し         |  |  |
| SP35 | 56         | 56         | 14         | 黒褐色土  | 無し・攪乱      |  |  |
| SP36 | 34         | 31         | 22         | 黒色土   | 無し         |  |  |
| SP37 | —          | 42         | 43         | 黒褐色土  | 無し         |  |  |
| SP38 | 43         | 34         | 54         | 暗茶褐色土 | 図12-3～5    |  |  |
| SP39 | —          | 48         | 60         | 黒褐色土  | 図12-1、2    |  |  |
| SP40 | 45         | 40         | 40         | 黒色土   | 無し         |  |  |
| SP41 | 49         | —          | 8          | 暗茶褐色土 | 無し・攪乱      |  |  |
| SP42 | 37         | 32         | 8          | 黒色土   | 無し・攪乱      |  |  |
| SP43 | 60         | 56         | 10         | 黒褐色土  | 無し         |  |  |
| SP44 | 43         | 32         | 51         | 黒色土   | 無し         |  |  |
| SP45 | 46         | 41         | 16         | 暗茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SP46 | 28         | 27         | 16         | 暗茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SP47 | 28         | 26         | 16         | 暗茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SP48 | 29         | 27         | 20         | 暗茶褐色土 | 無し         |  |  |
| SP49 | 21         | 18         | 13         | 暗茶褐色土 | 無し         |  |  |

#### 第4項 遺構外出土遺物（第17図）

ここでは、遺構に伴わない出土遺物のうち、主だったものについて記述する。17-1と17-2は表土（第8図第1層）から出土した。17-1は中国磁器の青磁皿である。疊付は無釉で、内外面に青磁釉が施され、高台内には透明釉が施されている。16世紀中頃に相当する。17-2は肥前系磁器の鉢である。外面に唐草文、内面に芙蓉文の染付が施されている。九陶編年V期（1800～1820年代）に相当する。17-3～5は黒ボク土層（第8図第2層）から出土した。17-3～5は須恵器の喪片である。外面にタタキが施されている。17-5は内外面にタタキが施され、外面に自然釉がかかっている。



第17図 1区遺構外出土遺物

## 第4節 2区の調査

### 第1項 調査概要（第18図）

当調査区は、宅地造成工事に伴う擁壁設置工事部分において、遺跡に影響が及ぶ範囲の調査を行ったものである。調査範囲は、南北約22.5m、東西約2mの細長い区画で、前述の試掘調査におけるT1トレーナーと南端を接して、その東側にはほぼ並行する。現況は畑であるが、隣地との境界に近く、生垣状に茶の木が植えられていた。

40～60cm程度の耕作土を剥ぎ取ると、遺構面となる黄褐色土の地山面が検出された。この地山面は北方向には現況地盤同様わずかに傾斜して下る程度であるが、東方向には、現況地盤に反して地山は深く耕作の影響を受けており、東辺の遺構面は西側に比して20cm程深く擾乱されていた。このような状況ではあったが、当該調査区では、溝跡3本（SD01～02）、不整形土坑3個（SX01～03）、ピット2個（SP50、51）を検出している。

なお、古代山陰道の推定線上にある、溝（SD01、02）と不整形土坑（SX01～03）は、それぞれ

道路側溝と波板状凹凸面である可能性が注意されるが（第5章総括で検証する）、不確定な要素も多いため、当節では個別に遺構の事実報告を行うこととする。また、検出したピット2個については、遺物も含まず不整形であり（写真図版20参照）、耕作の影響による擾乱と判断した。

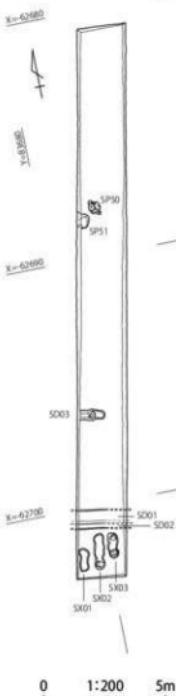
以下、各遺構について詳細を述べる。

### 第2項 溝状遺構

#### SD01（第19図）

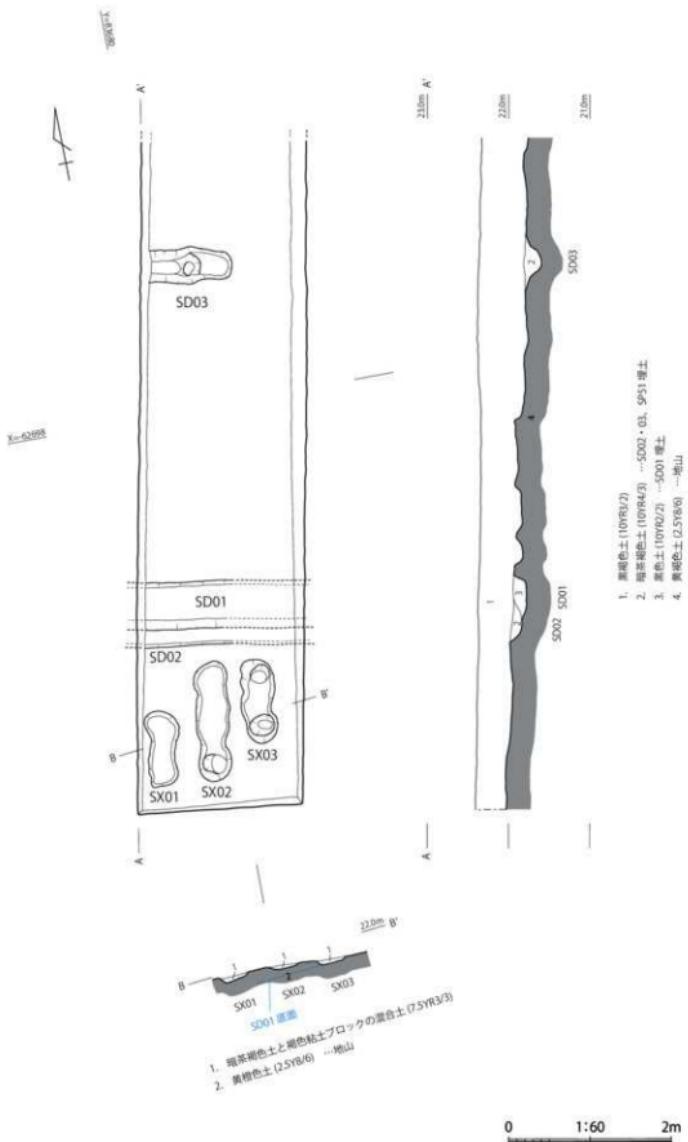
調査区南端付近で検出した東西方向に延びる溝状遺構で、第3章で前述した試掘調査のT1トレーナーで検出した同名遺構の東側の延長部を検出したものである。後述するSD02に溝上面の南肩部を削り込まれ、また東側は耕作の影響で地山ごと削平され消失しているが、本調査で検出した範囲では、東西長約1m、幅約0.5mで、深さは最大で17cmを測るものである。断面形状は浅いU字状を呈するもので、埋土はいわゆる「黒ボク」主体の黒色土（第3層）であった。

なお、試掘調査の成果と合わせると検出した東西長は約2mとなり、溝底の標高は21.74m前後で東西での高低差は捉えられなかった。また、東側に向けては消失しているため延長部の有無は判断できないが、西側に向けてはさらに溝は続くものと想定され、現状では全容は不明である。なお、古代山陰道の道路側溝とも考えられ、注意を要する。



第18図 2区遺構配置図

遺物については、試掘調査時と同様に一切出土しなかった。



第19図 2区遺構 (SD01～03, SX01～03) 平面・断面図

#### SD02（第19図）

前述のSD01の溝上面南肩に並行して延びる東西方向の溝状遺構で、切り合いの状態からSD01より新しいものである。SD01同様、東側は削平されて消失しており、また、西側の試掘調査T1トレーンチでは浅いためか検出していない。検出規模は、東西長約1m、幅約0.5mで、深さは最大で12cmを測る。断面形状は皿状を呈する浅いもので、埋土は暗茶褐色土（第2層）であった。

遺物は出土しなかった。

#### S0D3（第19図）

調査区の中央南寄りで検出した東西方向に延びる溝状遺構である。東側は耕作により削平されて消失しており、西側は調査区外に延びるが、試掘調査のT1トレーンチでは検出できておらず、少なくとも直線的に延びる長い溝では無いようである。検出規模は、東西長約1m、幅約0.4mで、深さは最大で22cmを測る。断面形状は鉢状を呈するもので、埋土はSD02同様の暗茶褐色土（第2層）であった。底面はやや歪に階段状を呈して西に向けて深くなるものではあるが、西端部ではやや抉れた様になり、調査区壁面ではまた浅くなる。

遺物は出土しなかった。

### 第3項 不整形土坑

#### SX01～03（第19図）

調査区南端で検出した長楕円形の不整形な3個の土坑である。長軸を南北に揃え、ほぼ等間隔に東西方向に並ぶもので、前述のSD01を古代道の道路側溝とした場合に、これに伴う波板状凹凸面とも捉えられる形状と出土状況であるが、ここでは確証が得られなかったことから事実報告にとどめ、西から東に向けて順に、SX01、02、03と呼称して説明を行いたい。まず、長軸の規模は、SX01が0.95m、SX02が1.5m、SX03が1.05mで、幅はいずれも30～40cmで不整形に波打つものであった。また、いずれの不整形土坑も深さは概ね5～10cm前後で、底面は凹凸がある。埋土もすべて暗茶褐色土と褐色粘土ブロックの混合土で、SD02やSD03に近い。検出面は耕作による削平で東に向かって深く削り込まれているが、底面の標高についても、東に向けて順に深くなり、SX01と03の比高差は10cm以上ある。また、SX03の底面はSD01の底面とほぼ同じ高さになっており、耕作による影響の可能性も考慮される。

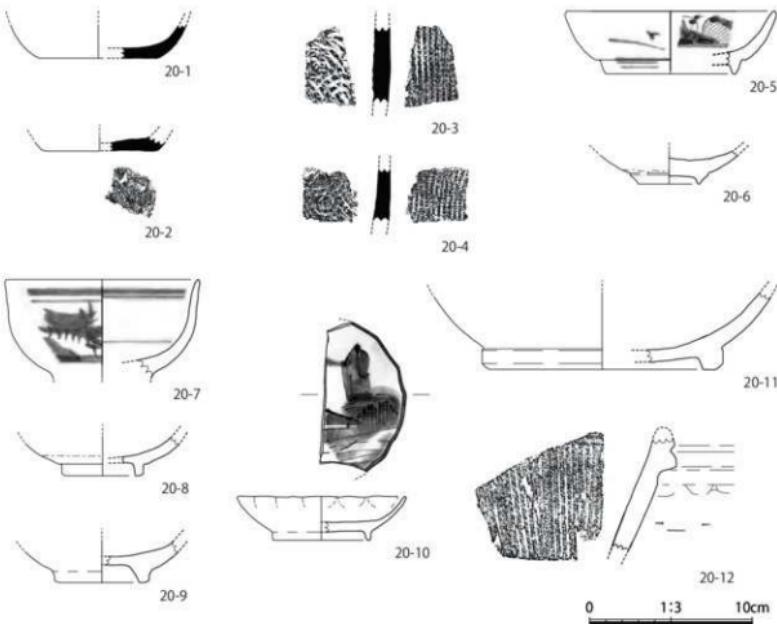
なお、遺物はいずれの土坑からも出土しなかった。

### 第4項 遺構外出土遺物（第20図）

ここでは、遺構に伴わない遺物について記述する。20-1～20-4は、耕作土直下ではあるが、遺構面直上から検出したもので、いずれも須恵器片である。20-1は、無高台環の底部片で、摩滅が著しいが、底面に回転糸切痕が微かに確認できる。国府編年の第4様式に比定できる。20-2も同じく、無高台環の底部片で、底面には回転糸切痕があり、国府編年の第4様式に比定できるものと考える。20-3と20-4は須恵器表の細片で外表面は格子目タタキ、内面は青海波紋が見られる。また、20-4には自然

釉が掛かっていた。

20-5～20-12についていはいずれも近世陶磁器で、耕作土中から出土したものであるが、当遺跡での活動状況を類推するため、主だった資料を掲載した。20-5は小型の肥前系の磁器皿片で、内外面に染付が施される。九陶編年IV期に比定される。20-6は肥前系の磁器皿の底部片で、蛇ノ目釉剥ぎが施されている。九陶編年IV期に比定される。20-7は肥前系の磁器碗の胸部片で、内外面に染付が施される。九陶編年IV期に比定される。20-8は肥前系（上野・高取）の陶器碗の底部片で、全体に薺灰釉が施されるが、高台底面のみ釉が剥ぎ取ってある。18世紀後半頃のものと推察される。20-9は陶器碗の底部付近の破片で、底部以外には全体に青地の釉が施される。在地の布志名焼によるものと考えられ、19世紀前半頃のものと推定される。20-10は肥前系の磁器皿片で、口縁部が波打つ型打成形で、全体に透明釉が施され、内面には風景文が染付により描かれる。また、口縁上端には銹釉が施される。九陶編年V期に比定される。20-11は鉢の底部付近の破片で、内面にのみ白濁釉が施され、一部胎土目跡が残る。在地の布志名焼によるものと考えられ、19世紀前半頃のものと推定される。20-12は備前系の擂鉢の口縁部片で、口縁部の肥厚帯には1条の四線が施される。19世紀前半頃のものと推定される。



第20図 2区遺構外出土遺物

## 第5章 総括

### 第1節 遺構の時期と様相

今回の調査で検出された遺構は、試掘調査成果も含めると、掘立柱建物跡2棟、溝3条、不整形土坑3基、井戸1基、その他土坑と柱穴である。遺構面の大半は耕作土直下で検出され、擾乱も多く、検出した遺構も耕作の影響によるものか判然としない状態のものがあったが、本節では、遺物を伴う遺構から、遺跡全体の時期的な様相について整理しておきたい。

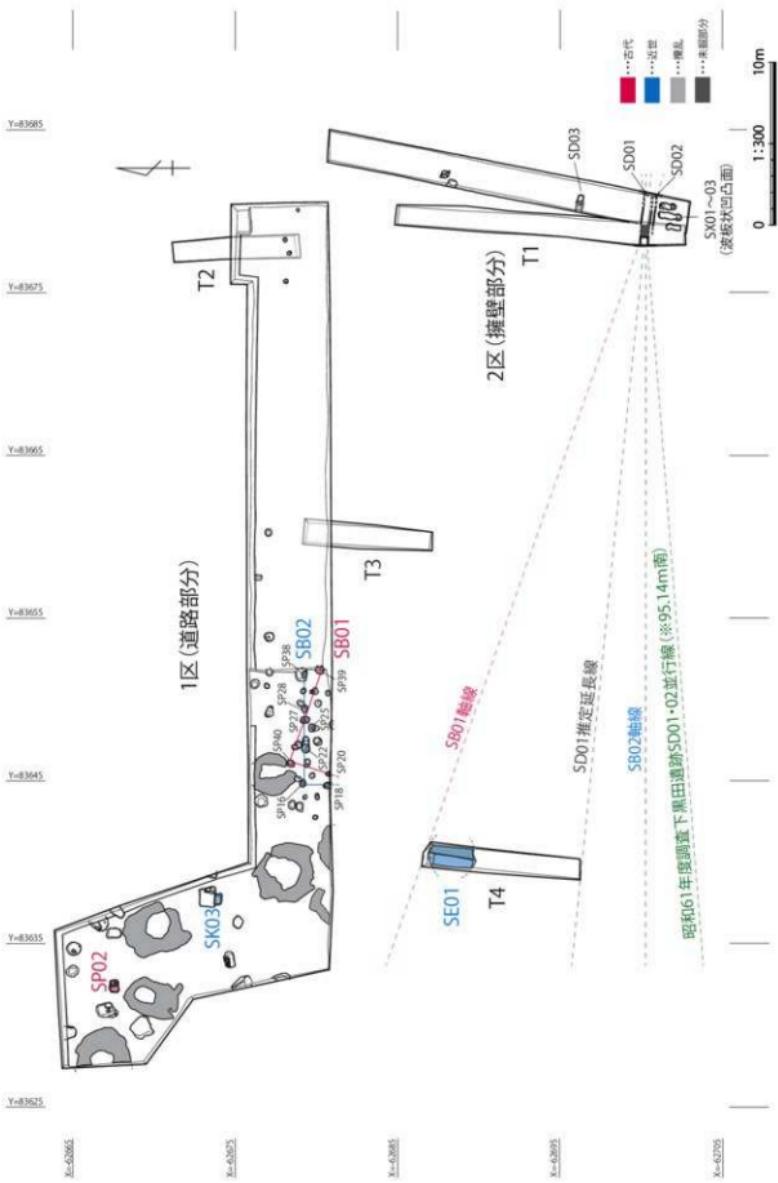
まず、各遺構の時期については、第21図に示すとおり、出土遺物等から古代と近世の2時期に限定されるものであった。

近世の遺構については、井戸(SE01)と掘立柱建物跡(SB02)が検出された。いずれも17世紀後半頃までの遺物を伴うもので、この時期には居住地もしくは耕作に伴う簡易な施設が存在した可能性が想起される。この他、柱穴群内のSP25も17世紀前半の遺物が、ごみ穴らしきSK03には18世紀前半の遺物が僅かに見られた。また、表層の耕作土中に、近現代の遺物と混在するものの、18世紀後半～19世紀前半の遺物が多くみられた。直接的では無かったにせよ、近世を通じて連綿と人々の生活があったことが窺える。

古代の遺構については、8世紀後半の遺物を伴うSB01と、詳細な時期は不明であるが須恵器片が伴うSP02を検出した。いずれも遺物が小片で時期の確定に不安はあるが、近世の掘立柱建物SB02とは主軸方位や柱穴埋土が異なるため、古代遺構と考えたい。ただし、当該遺跡の昭和61(1986)年調査における古代の建物跡(SB01、SB02)とは柱穴規模や主軸方位が異なり、距離的にも離れていたことから、正倉の施設群との関連性のない簡素な建物であったものと想定する。

さて、今回の調査で最も問題となるのは、第4章第5節で述べたとおり、古代山陰道推定線上にあるSD01である。遺物を伴わず、単独で時期を検討することはできないため、ここではその他の要素や周囲の状況等からこの遺構の時期について推測を試みたい。まず、溝の軸方位については、第21図に示すとおり古代のSB01より、近世のSB02の主軸方位に近く、近世に属する可能性を考慮させられるものであった。また、北側で出土した山代正倉跡の区画溝や隣接する古代の建物跡(昭和61(1986)年度調査の下黒田遺跡SD01、SD02、SB01、SB02(註4))と推定されている溝の主軸と比較しても、やはり今回検出のSD01の軸とはズレが生じ、軸方位の検討からは古代遺構であることを傍証できない。しかし、溝の埋土については、古代の遺物を伴うSB01の柱穴埋土と同じ黒色土であり、古代遺構である可能性を想定できるものであった。また、周囲の発掘調査例に照らしてみると、このSD01の延長上に、西側には平成29(2017)年度に松江市が実施した川原宮Ⅲ遺跡の古代道跡(SF01)が存在し(註5)、東側には小無田遺跡の古代の道路遺構と推定される溝跡や波板状凹凸面が存在する(註6)。現状では類推を重ねるしかないが、SD01は古代に属する遺構であり、さらには古代道の道路側溝である可能性も十分考慮すべきものと考えておきたい。

以上、今回の調査範囲については、北側の山代郷正倉跡や黒田館の様に、建物が密集するような状況は確認できず、古代から近世に至るまで簡易な掘立柱建物と井戸が存在する比較的閑散とした状況



第21図 試掘調査・本調査遺構時期別色分図

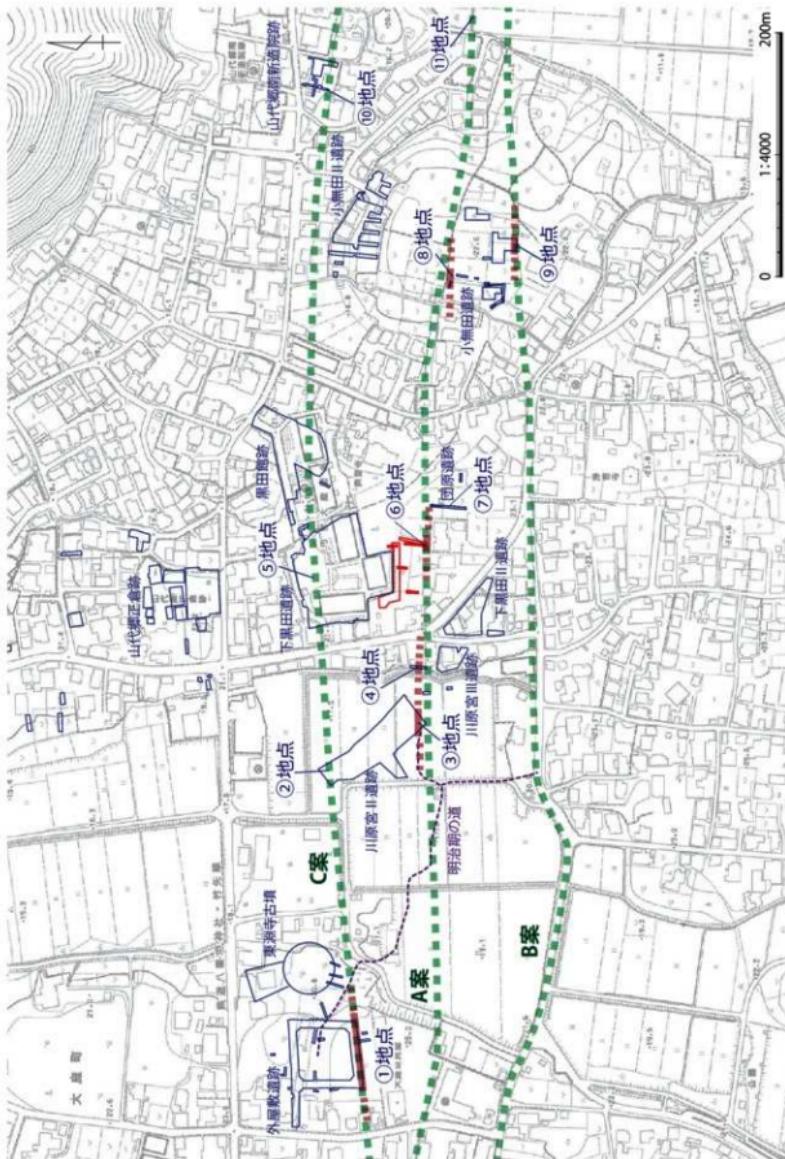
であった。近世においては、かつての大庭村における畠地の一所として利用されたことが想像されるが、古代においては遺跡の密集地域であり、遺構のみならずこの時期の遺物もほとんど出土しないことはやや異質な感がある。このことは、耕作や造成等の影響により、地山が削平されて遺構が消失した可能性も考えられるが、あるいは正倉周辺には意図的に空閑地が設けられていた可能性も考慮される。これは、「倉庫令」(註7)において、「倉」の「五十丈(約150m)」の範囲内には他の建物を設けることを禁止する旨の記載がある。正倉への延焼を防ぐためと推察されるが、当調査地は、前述の正倉南辺の推定溝から100m圏内にあり、あるいは意図的に空閑地であったことも考慮しておきたい。

## 第2節 古代山陰道との関連の検討

今回の調査箇所については、古代山陰道の推定線上に位置しており、調査開始当初から注目される調査であることを述べてきた。そのうえで、試掘調査を含めて東西方向の溝(SD01)と波板状凹凸面の可能性のある不整形土坑(SX01～03)を検出するという成果が得られ、まさしく古代山陰道の一部を捉えたものとも思われた。しかし、これまで述べてきたように遺構は遺物を伴わず、時期的な確証が得られず、また遺構としても不確かな部分が多いもので、積極的に古代山陰道と評価するには躊躇される結果であった。とはいっても、前節で述べたとおり、これが古代山陰道に伴う遺構であることを否定するものではなく、現状では古代山陰道の有力候補地点として注意すべきものであると評価されることから、以下では、これまでの古代山陰道に関する見解と周辺の調査例について検証し、今後の課題について整理してまとめとしたい。

まず、ここで述べる古代山陰道とは、古代律令制の中で山陰において整備された駅路であり、当該遺跡周辺においては、『出雲國風土記』で東西方向に延びる「正西道」と記載されるものである。この「正西道」については、「十字街」から西に向けては「野代橋」を通過し、以降「出雲郡家」、「神門郡家」等を超えて出雲国「国西堺」に至るもので、かねてからその路線の推定位置については多くの検討がなされてきた。以下では、このうち当該遺跡周辺において詳細に示された3つの推定ルート(第22図A・B・C案)と発掘調査例について検討したい。

A案は、島根県古代文化センターが行った風土記の丘周辺の復元事業において採用されたもの(註8)、中村太一氏が示した古代山陰道の推定線(註9)にほぼ準じるものとしている。出雲國府跡に近い推定「十字街」(註10、以下「推定十字街」と記す。)から、西に向けて山代町と大草町の境界線(⑪地点)をなぞって直線的に延び、小無田遺跡のある低丘陵地の現赤道(⑧地点)を通過して、山代郷南新造院や山代郷正倉跡の東西軸を基準に若干の屈曲を持ちつつさらに西に向かって描かれる推定線である。現状最も汎用されているもので、当該調査地を通過するうえに、まさしくSD01の検出位置とも重なっている。さらにこのルート上の発掘調査においても、平成29年度に松江市が行った川原宮Ⅲ遺跡での宅地造成に伴う擁壁設置部分で行った立会調査において、切通しによる道路遺構(SF01)(④地点)が検出され(註11)、さらに、同じく松江市による小無田遺跡でのトレンチ調査においても、溝跡と波板状凹凸面(⑧地点)が確認されている(註12)。また、直接的に道路遺構は検出され



第22図 古代山陰道推定線と周辺の発掘調査地及び道路状遺構配置図

ていないが、川原宮II遺跡の調査では、古代の粘土探掘坑の空白域（③地点）を通過しており（註13）、古代道の推定線としての蓋然性が高まっている。なお、团原遺跡における松江市の令和2年度試掘調査においても道路遺構は確認されなかつたが（⑦地点）、耕作土直下が地山で削平を受けており、当該箇所では消失している可能性が高いと考えられる（註14）。

B案は、勝部昭氏が提起したもので（註15）、国府を中心とした1里ごとの推定計画線に沿い、近世絵図にも描かれている現行道路から「推定十字街」まで延びる東西道を、古代山陰道の可能性が高いものとした。この推定線上での発掘調査例は、現行道路と重なるためほとんどないが、小無田遺跡地内において県教育委員会が昭和58（1983）年に行った発掘調査（註16）で、東西方向の溝（SD01）（⑨地点）が発見されており、周辺には短冊状の地割も確認できたことから、古代道の痕跡の可能性が示唆されている。

なお、A・B両案とも、その出典とした資料において、互いのルートをほぼ同様の推定線として、並走する準幹線路や別の推定線として描いており、それぞれの存在を否定はしてはいない。互いが古代道として共存する可能性も示している（註17）。

C案は、外屋敷遺跡で検出されたSF01（①地点）を起点に、その直線上にある下黒田遺跡の正倉区画溝（昭和61年調査でのSD01・02）（⑤地点）のラインを結んだもので、小山泰生氏により提起されたものである（註18）。①地点と⑤地点の溝の主軸における直線性に注目したもので、この中間にある川原宮II遺跡においても、道路遺構そのものはないが、古代の粘土探掘坑の空白域（②地点）を通過することも根拠に挙げている。また、東に向けては山代郷南新造院の南辺推定箇所（⑩地点）へとほぼ直進する。ただし、このルートをさらに東に延ばすと、国府跡や推定十字街とは大きくズレ、古代に属す建物跡も道路推定線上に位置することなど、否定的な要素もある。また、①地点で想定される道幅は4m程度と駅路としてはやや狭く、報告では「正西道」ではなく準幹線路である可能性が指摘されている。

以上、3案について説明したが、古代道路遺構としてだけの正否を問うのであれば、同時に3案の道は共存し得るもので、排他的に捉える必要はなく、また官道整備以前の幹線道ともいべき道の存在も考慮される。もし、いずれかを古代山陰道に特定できるとするならば、道路の敷設時期の慎重な見極めと、他の候補たる道路遺構に比して道幅が隔絶することが必要な条件になるものと考えるが、現状の調査成果の中では考証は難しい。そんな中、限定的な範囲であるが、現状で検討可能な道幅について以下で若干の整理をしたい。

現在、道幅が検討できる遺構を伴うのは、A案の④地点とC案の①地点である。A案においては、④地点で検出された切通しは上端幅が約9m、底面幅が約5.3mであった。またC案においては、①地点で側溝の外幅で約9m、芯々で6.6m、内幅（最終期）で5.4mであった。両遺構ともほぼ同規模で、格差は見られなかった。では、その他の古代山陰道として推定されている遺跡について検証すると、渋ヶ谷遺跡群においては幅9～12mの道路遺構が検出されており（註19）、杉沢遺跡においては道路側溝の芯々で約9mを測るものであった（註20）。その他の遺跡の検証からも、「道幅9m程度が、山陰道の標準的な規模とみられる」とされている（註21）。これと比較すると、両遺構の道路幅はや

や狭いという評価となり、このことはC案でも述べたとおり、両ルートとも準幹線道に位置づけられる可能性を示唆する。ただし、同じく古代山陰道の有力候補地である松本古墳群の「I区道路遺構」においても、切通上端は10mを超えるものの、有効な道幅は4m前後であり、前述の①、④地点と同程度となる（註22）。今後、その他の箇所で幅9mの古代道路遺構が検出されない限り、十分に古代山陰道である可能性を残すものと評価できるが、現状の成果から結論には至れないと考える。

さて、上記では3案について古代山陰道の特定について検討した。しかし、古代山陰道のルートを特定するもう一つの考え方として、当該地周辺において唯一の古代道路遺構であることが挙げられる。この場合、すでに見つかっている道路遺構として①、④、⑧地点を結ぶ推定線が挙げられる。①地点からやや南に屈曲して③、④地点へと向かうため直線性を欠くうえ、全体像の不明な⑦地点を古代道路遺構ではないと判断するなど、やや論拠に不安は残すが、その他の古代道路遺構が検出されない限り有力なルートと考えて良いものと判断する。なお、補足ではあるが、①と③地点との繋がり部分に、明治期の切図（註23）や戦後の空撮写真から谷部を屈曲しながら横断する畦道が確認できる（第22図参照）。

以上、当該地周辺における古代山陰道の推定線について検討した。現状の成果からは、道幅が狭く、複数の推定ルートの存在もあり断定が困難なもの、現状遺構を繋ぐルートが有力と考えるのが妥当と思われる。今回の調査で検出したSD01もこの有力ルート上にあり、古代山陰道の推定ルートを検証するうえにおいても貴重な成果を追加したものと評価できる。今後は、さらなる調査の増加によって、古代山陰道のルートの特定とその詳細な構造が明らかになることを期待したい。

## 註

- 註1) 島根県教育委員会 2020年『下黒田Ⅱ遺跡』国道432号大庭バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3
- 註2) 中村博明 1988年「N. 自然科学的調査」『下黒田遺跡発掘調査報告書』松江市建設部建築課・松江市教育委員会
- 註3) 島根県古代文化センター 2009年『出雲国府周辺の復元研究 - 古代八雲立つ風土記の丘復元の記録 -』
- 註4) 松江市建設部建築課・松江市教育委員会 1988年『下黒田遺跡発掘調査報告書』
- 註5) 松江市教育委員会 2019年『平成29年度 松江市埋蔵文化財年報』松江市文化財調査報告書第191集
- 註6) 平成20年度に民間事業に伴う松江市が実施した試掘調査成果による。未刊行。
- 註7) 大宝律令（701年）からあった篇目とされ、養老律令（757年）に引き継がれるが、原文は散逸。『国史大系第12巻』（合名会社経済雑誌社1900年発行）において律令の解説書である「令義解」（833年）における逸文が復元掲載されている。
- 註8) 島根県古代文化センター 2009年『出雲国府周辺の復元研究 - 古代八雲立つ風土記の丘復元の記録 -』
- 註9) 中村太一 1996年『日本古代国家と計画道路』吉川弘文館
- 註10) 註8において比定されるもの。
- 註11) 註5と同じ
- 註12) 註6と同じ
- 註13) 島根県教育委員会 2016年『柳原遺跡・茶臼遺跡・川原宮Ⅱ遺跡』国道432号大庭バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1
- 註14) 令和2年度に民間事業に伴う松江市が実施した試掘調査成果による。未刊行。
- 註15) 勝部昭 1993年『正西道の検討』『出雲古代史研究3』出雲古代史研究会
- 註16) 島根県教育委員会 1984年『風土記の丘内地遺跡発掘調査報告書III 小無田遺跡』
- 註17) 現況の山代町と大草町の境界線部分（⑨地点）付近においては、推定線にズレが生じている。
- 註18) 松江市教育委員会・公益財団法人 松江市スポーツ・文化振興財團 2016年『大庭センターハイツ宅地造成工事に伴う発掘調査報告書 外屋敷遺跡』松江市文化財調査報告書第177集

- 註 19) 渋ヶ谷遺跡群における調査で、掛松遺跡のSD26 他、多数の溝状遺構等が古代道として再評価されたもの。松江市教育委員会・財団法人 松江市教育文化振興事業団 2006 年『渋ヶ谷遺跡群発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書 第 103 集
- 註 20) 出雲市教育委員会 2017 年『出雲市の文化財報告 33 出雲國古代山陰道発掘調査報告書・出雲市三井II・杉沢・長原遺跡の調査』
- 註 21) 大橋泰夫 2017 年「第3節 杉沢遺跡等の道路構造について」『出雲市の文化財報告 33 出雲國古代山陰道発掘調査報告書・出雲市三井II・杉沢・長原遺跡の調査』出雲市教育委員会
- 註 22) 烏根郡教育委員会 1997 年『松本古墳群・大角山古墳群・すべりざこ古墳群』一般国道 9 号松江道路（西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 3
- 註 23) 「明治二十二年三月調整 大庭村絵面図」松江市歴史まちづくり部史料調査課所蔵

遺物観察表 中法皇のカッコ書きの数値は、復元または残存法量を示す

| 遺物<br>番号 | 調査区 | 遺構名                      | 種類  | 基盤・部位       | 法量 (cm) |       |       | 調整・文様の特徴                           |               |         | 色調                     | 備考                              |
|----------|-----|--------------------------|-----|-------------|---------|-------|-------|------------------------------------|---------------|---------|------------------------|---------------------------------|
|          |     |                          |     |             | 口径      | 底径    | 高さ    | 調査・手法                              | 歯土・焼成         | 調査・手法   |                        |                                 |
| 6-1      | T4  | SE01                     | 須恵器 | 甕・瓶部        | —       | —     | (7.5) | 外<br>内<br>ヨコナデ<br>ナデ・タキ            | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 灰褐色<br>外<br>内<br>灰褐色   | —                               |
| 6-2      | T4  | SE01                     | 須恵器 | 底盤・底座       | —       | 5.0   | (2.5) | 外<br>内<br>透明白釉<br>透明白釉             | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 淡黃褐色<br>外<br>内<br>淡黃褐色 | 九陶Ⅲ期(1650～1690年代)               |
| 6-3      | T4  | SE01                     | 須恵器 | 甕           | —       | 5.0   | (3.0) | 外<br>内<br>白釉輪、刷毛文の染付<br>白釉輪、刷毛文の染付 | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 灰白色<br>外<br>内<br>灰白色   | 初期伊万期 九陶Ⅱ～Ⅲ期(1650～1650-41°C)    |
| 6-4      | T4  | SE01                     | 磁器  | 火入か香炉       | (9.0)   | —     | (5.6) | 外<br>内<br>透明白釉、斜格子文と草文の染付          | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 淡白色<br>外<br>内<br>淡白色   | 九陶Ⅲ期(1650～1690年代)               |
| 12-1     | 11K | SP39                     | 土師器 | 無高台坪<br>・底座 | —       | (6.2) | (1.0) | 外<br>内<br>ナデ・回転切削                  | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>不良 | 褐色<br>外<br>内<br>褐色     | 吉田系四型 4 型式<br>(8世紀第3～第4四半期)     |
| 12-2     | 11K | SP39                     | 須恵器 | 甕・胸部        | —       | —     | (4.8) | 外<br>内<br>豊富日タキ                    | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 灰褐色<br>外<br>内<br>灰褐色   | —                               |
| 12-3     | 11K | SP38                     | 陶器  | 甕           | (11.6)  | 3.6   | 2.6   | 外<br>内<br>灰釉                       | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 灰白色<br>外<br>内<br>灰白色   | 更級系須恵器土日皿 九陶Ⅱ期<br>(1610年～1650年) |
| 12-4     | 11K | SP38                     | 土師器 | 皿・口縁部       | (13.0)  | —     | (2.5) | 外<br>内<br>ナデ                       | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 褐色<br>外<br>内<br>褐色     | つくね形皿 京都系<br>(17世紀前半)           |
| 12-5     | 11K | SP38                     | 土師器 | 皿・口縁部       | (11.0)  | —     | (2.5) | 外<br>内<br>豊富ナデ・斜面正輪                | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 黄褐色<br>外<br>内<br>黄褐色   | 打明皿 まくづね形皿<br>京都系 (17世紀前半)      |
| 16-1     | 11K | SK03                     | 陶器  | 火入・口縁部      | —       | —     | (2.1) | 外<br>内<br>透明白釉                     | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 黄褐色<br>外<br>内<br>黄褐色   | 18世紀前半                          |
| 16-2     | 11K | SK03                     | 陶器  | 跡・口縁部       | —       | —     | (2.8) | 外<br>内<br>灰釉                       | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 黄褐色<br>外<br>内<br>黄褐色   | 在地系陶器                           |
| 16-3     | 11K | SK03                     | 陶器  | 痕跡・注口       | —       | —     | (3.3) | 外<br>内<br>ヨコナデ                     | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 赤褐色<br>外<br>内<br>赤褐色   | 織前輪窯の注口部分のみ残存<br>18世紀前半         |
| 16-4     | 11K | SP02                     | 須恵器 | 甕・胸部        | —       | —     | (2.7) | 外<br>内<br>豊富日タキ                    | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 灰褐色<br>外<br>内<br>灰褐色   | —                               |
| 16-5     | 11K | SP02                     | 須恵器 | 甕・胸部        | —       | —     | (2.7) | 外<br>内<br>豊富日タキ                    | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 灰褐色<br>外<br>内<br>灰褐色   | —                               |
| 16-6     | 11K | SP25                     | 土師器 | 皿・口縁部       | (11.7)  | —     | (2.2) | 外<br>内<br>ナデ                       | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>不良 | 黄褐色<br>外<br>内<br>黄褐色   | 17世紀前半 京都系                      |
| 17-1     | 11K | 表土                       | 古磁  | 皿           | —       | (5.2) | (1.3) | 外<br>内<br>青磁輪                      | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 綠灰色<br>外<br>内<br>綠灰色   | 中世磁器 舟底窯 菊形(16世紀中期)             |
| 17-2     | 11K | 表土                       | 古磁  | 跡           | (16.0)  | —     | (6.2) | 外<br>内<br>豊富之の小口                   | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 綠灰色<br>外<br>内<br>綠灰色   | 織前系 九陶Ⅳ期 (1800～1820年代)          |
| 17-3     | 11K | 黒瓦タケ<br>屋根               | 須恵器 | 甕・胸部        | —       | —     | (4.4) | 外<br>内<br>豊富日タキ                    | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 黑褐色<br>外<br>内<br>黑褐色   | —                               |
| 17-4     | 11K | 黒瓦タケ<br>屋根               | 須恵器 | 甕・胸部        | —       | —     | (3.2) | 外<br>内<br>豊富日タキ                    | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 灰褐色<br>外<br>内<br>灰褐色   | —                               |
| 17-5     | 11K | 黒瓦タケ<br>屋根               | 須恵器 | 甕・胸部        | —       | —     | (3.3) | 外<br>内<br>豊富日タキ                    | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 灰褐色<br>外<br>内<br>灰褐色   | —                               |
| 20-1     | 21K | 地山山<br>上直上<br>地山山<br>上直上 | 須恵器 | 無高台坪<br>・底座 | —       | (7.1) | (2.1) | 外<br>内<br>豊富日タキ                    | 回転切削          | 密<br>良好 | 灰褐色<br>外<br>内<br>灰褐色   | 国府第4号火<br>8世紀第3～第4四半期           |
| 20-2     | 21K | 地山山<br>上直上<br>地山山<br>上直上 | 須恵器 | 無高台坪<br>・底座 | —       | (7.0) | (0.9) | 外<br>内<br>豊富日タキ                    | 回転切削          | 密<br>良好 | 灰褐色<br>外<br>内<br>灰褐色   | 国府第4号火<br>(8世紀第3～第4四半期)         |
| 20-3     | 21K | 地山山<br>上直上<br>地山山<br>上直上 | 須恵器 | 甕           | —       | —     | (4.6) | 外<br>内<br>豊富日タキ                    | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 灰褐色<br>外<br>内<br>灰褐色   | —                               |
| 20-4     | 21K | 地山山<br>上直上<br>地山山<br>上直上 | 須恵器 | 甕・胸部        | —       | —     | (3.2) | 外<br>内<br>豊富日タキ                    | 自然輪           | 密<br>良好 | 黑褐色<br>外<br>内<br>黑褐色   | —                               |
| 20-5     | 21K | 複瓦                       | 磁器  | 皿           | (12.7)  | (7.9) | 3.9   | 外<br>内<br>豊富之の染付                   | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 白褐色<br>外<br>内<br>白褐色   | 更級系 九陶Ⅳ期 (1740～1780年代)          |
| 20-6     | 21K | 複瓦                       | 磁器  | 皿・底部        | —       | (3.8) | (2.0) | 外<br>内<br>透明白釉                     | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 白色<br>外<br>内<br>白色     | 更級系 九陶Ⅳ期 (1750～1780年代)          |
| 20-7     | 21K | 複瓦                       | 磁器  | 皿           | (11.8)  | —     | (5.5) | 外<br>内<br>豊富之の染付                   | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 灰褐色<br>外<br>内<br>灰褐色   | 更級系 九陶Ⅳ期 (1770～1780年代)          |
| 20-8     | 21K | 複瓦                       | 陶器  | 皿・底部        | —       | —     | (2.6) | 外<br>内<br>豊富之の染付                   | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 青褐色<br>外<br>内<br>青褐色   | 更級系 九世紀後半<br>日本古風               |
| 20-9     | 21K | 複瓦                       | 陶器  | 皿・底部        | —       | (4.6) | (2.4) | 外<br>内<br>青地輪                      | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 青褐色<br>外<br>内<br>青褐色   | 向左字型<br>19世紀前半                  |
| 20-10    | 21K | 複瓦                       | 磁器  | 菊形皿         | (10.2)  | (5.8) | 2.7   | 外<br>内<br>透明白釉の染付                  | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 白色<br>外<br>内<br>白色     | 豊前城、肥前城、口跡<br>九陶Ⅳ期(1810～1820年代) |
| 20-11    | 21K | 複瓦                       | 陶器  | 跡           | —       | —     | (7.0) | 外<br>内<br>ヨコナデ<br>白地輪              | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 赤褐色<br>外<br>内<br>赤褐色   | 布志名 在地系<br>(19世紀前半)             |
| 20-12    | 21K | 複瓦                       | 陶器  | 指跡          | —       | —     | (7.0) | 外<br>内<br>ヨコナリ                     | 歯土<br>密<br>焼成 | 密<br>良好 | 青褐色<br>外<br>内<br>青褐色   | 織前系 19世紀前半                      |

# 写 真 図 版

※遺物掲載番号と遺物写真番号は対応している。(例:図版21 6-1は第6図-1を示す)





1. 調査前全景 (南東から)



2. 2区調査前風景 (北東から)

図版2



1. T1 完掘状況（南から）



2. T1 SD01 掘出状況（北東から）



1. T2 完掘状況（南東から）

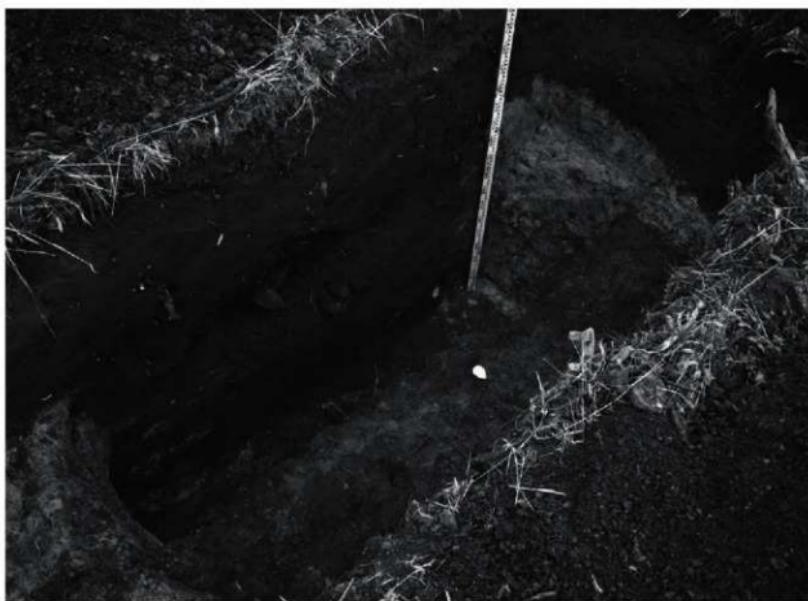


2. T3 完掘状況（南東から）

図版4



1. T4 完掘状況（北東から）



2. T4 井戸 棟出状況（北西から）



1. 1区西半 完掘状況（南東から）



2. 1区中央 完掘状況（南西から）

図版6



1. 1区東半 完掘状況 (東から)



2. 1区南壁土層断面 (A-A') 東 (北西から)



3. 1区南壁土層断面 (A-A') 西 (北西から)



1. 掘立柱建物跡 SB01・SB02 完掘状況① (北西から)



2. 掘立柱建物跡 SB01・SB02 完掘状況② (南東から)



3. SB01(柱穴 SP20) 完掘状況 (北から)



4. SB01(柱穴 SP27) 半截状況 (南から)

図版8



1. SB01(柱穴 SP27) 完掘状況 (南から)



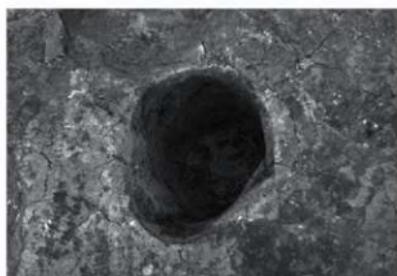
2. SB01(柱穴 SP39) 半截状況 (南東から)



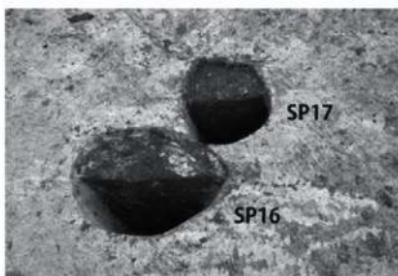
3. SB01(柱穴 SP39) 完掘状況 (南東から)



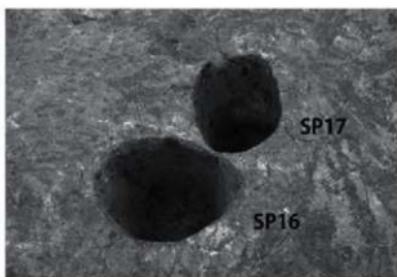
4. SB01(柱穴 SP40) 半截状況 (南から)



5. SB01(柱穴 SP40) 完掘状況 (南から)



6. SB02(柱穴 SP16) 半截状況 (南から)



7. SB02(柱穴 SP16) 完掘状況 (南から)



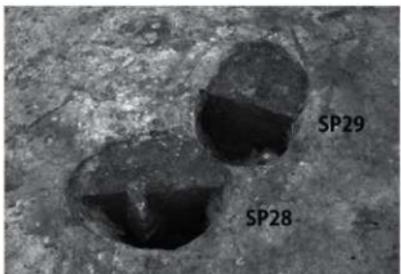
8. SB02(柱穴 SP18) 完掘状況 (北から)



1. SB02(柱穴SP22) 半截状況 (南から)



2. 同左 完掘状況 (南から)



3. SB02(柱穴SP28) 半截状況 (南から)



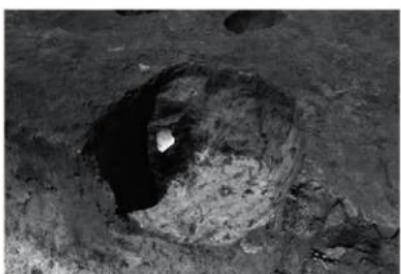
4. 同左 完掘状況 (西から)



5. SB02(柱穴SP28) 磐盤石 (北から)



6. SB02(柱穴SP38) 半截状況 (東から)

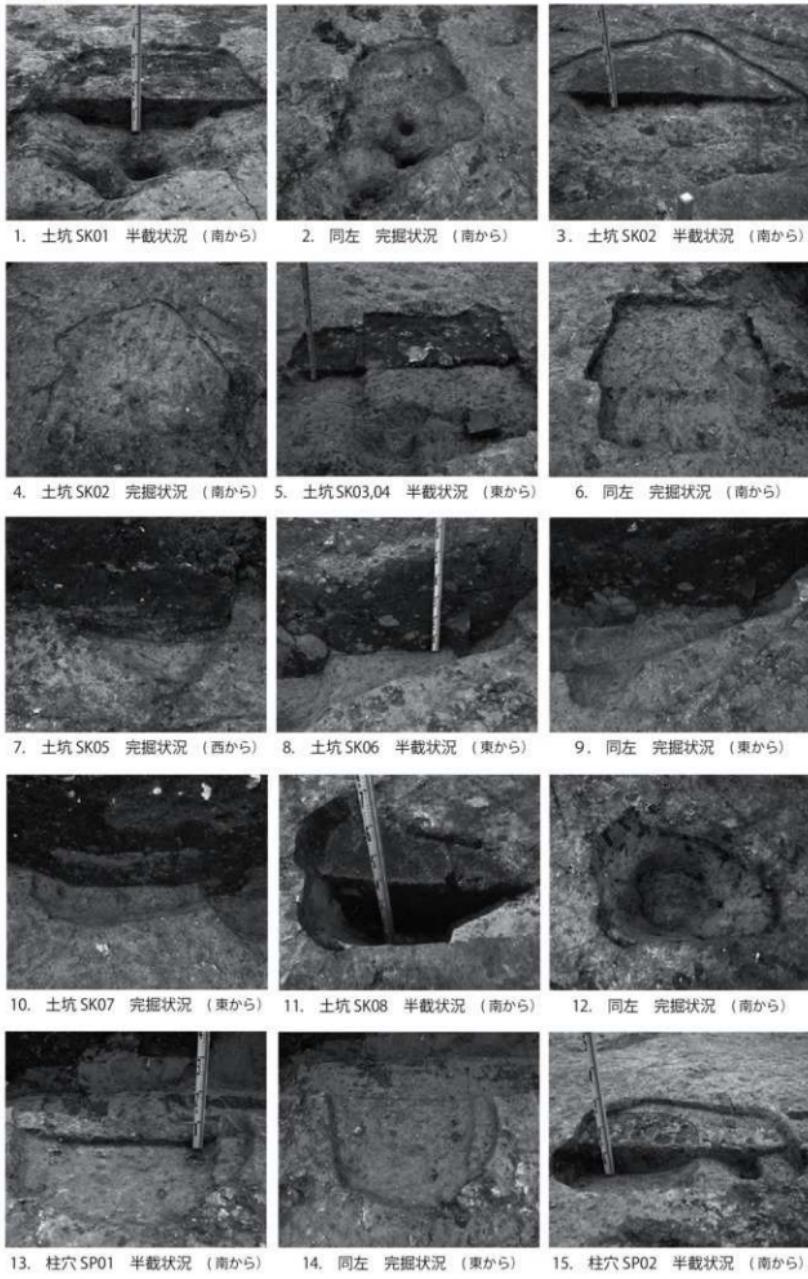


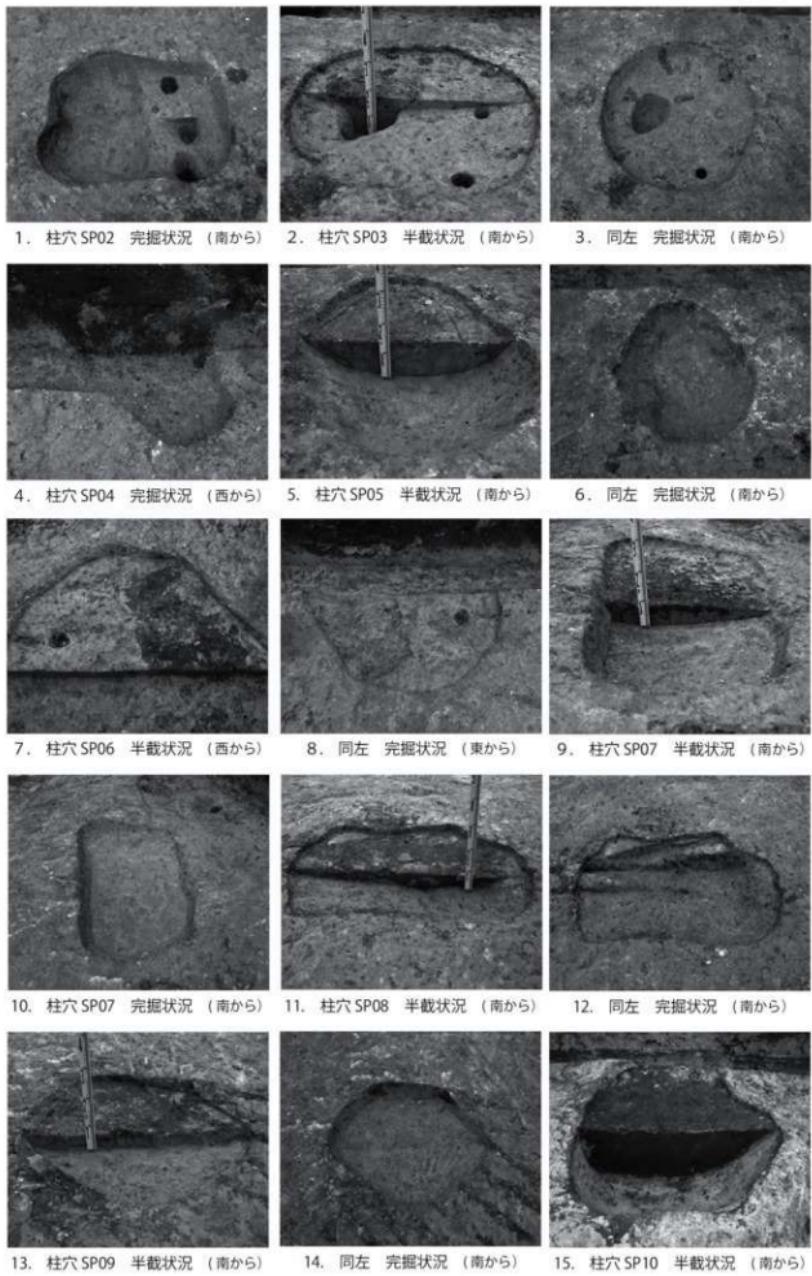
7. SB02(柱穴SP38) 遺物出土状況① (北東から)



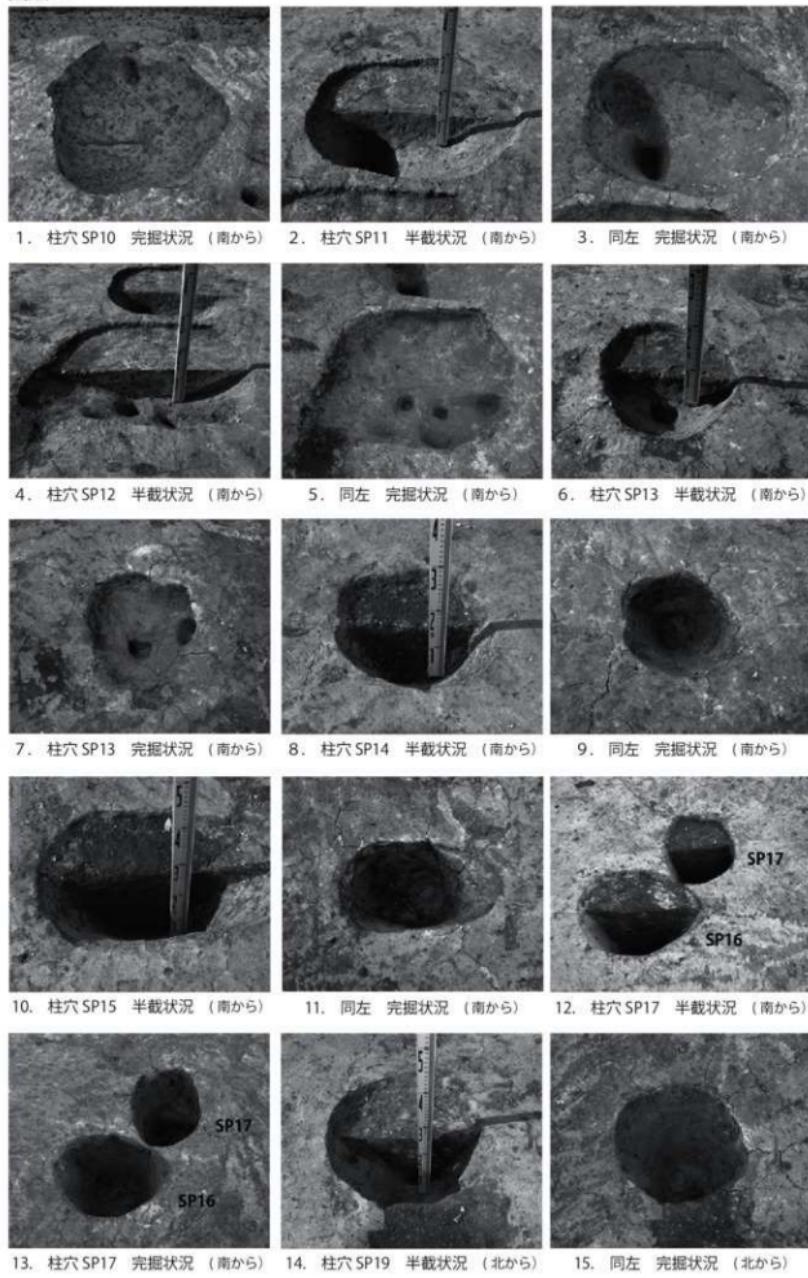
8. 同左 遺物出土状況② (北東から)

図版 10

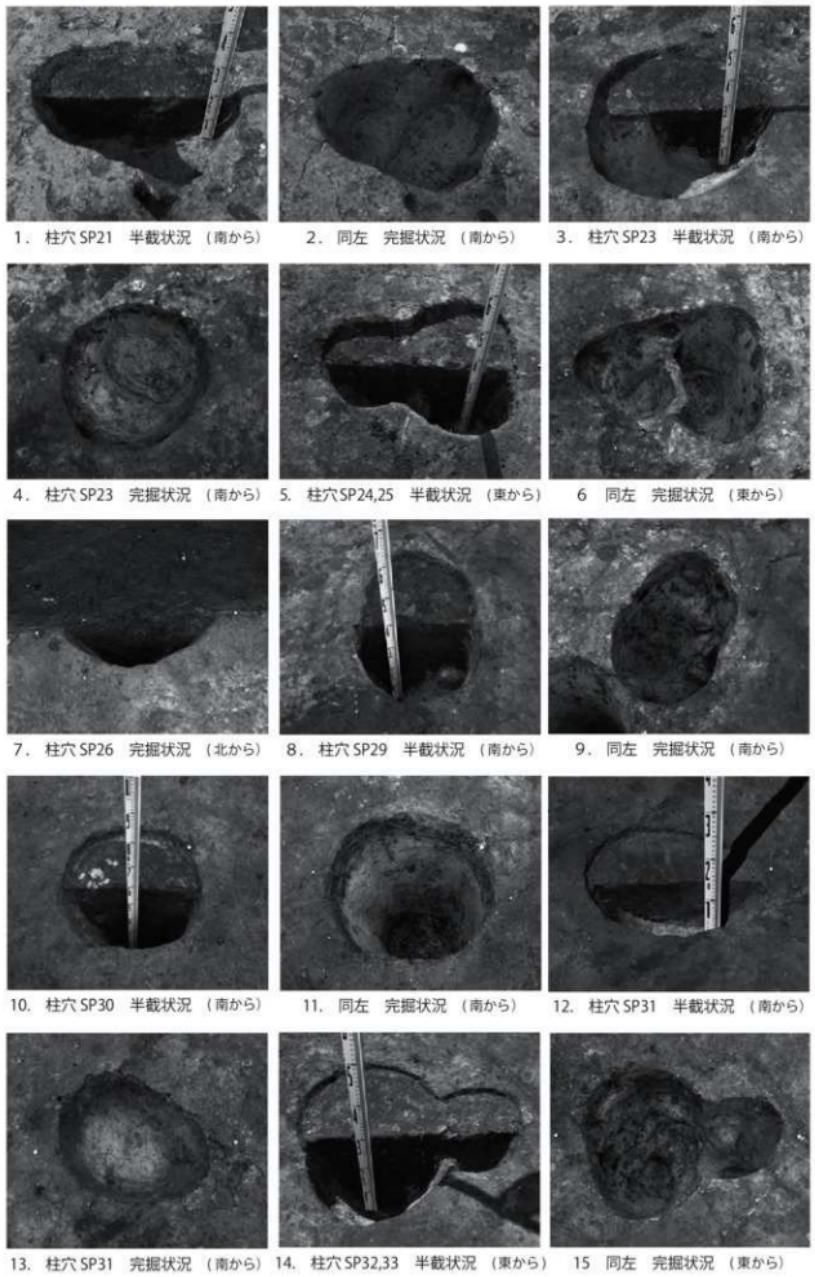




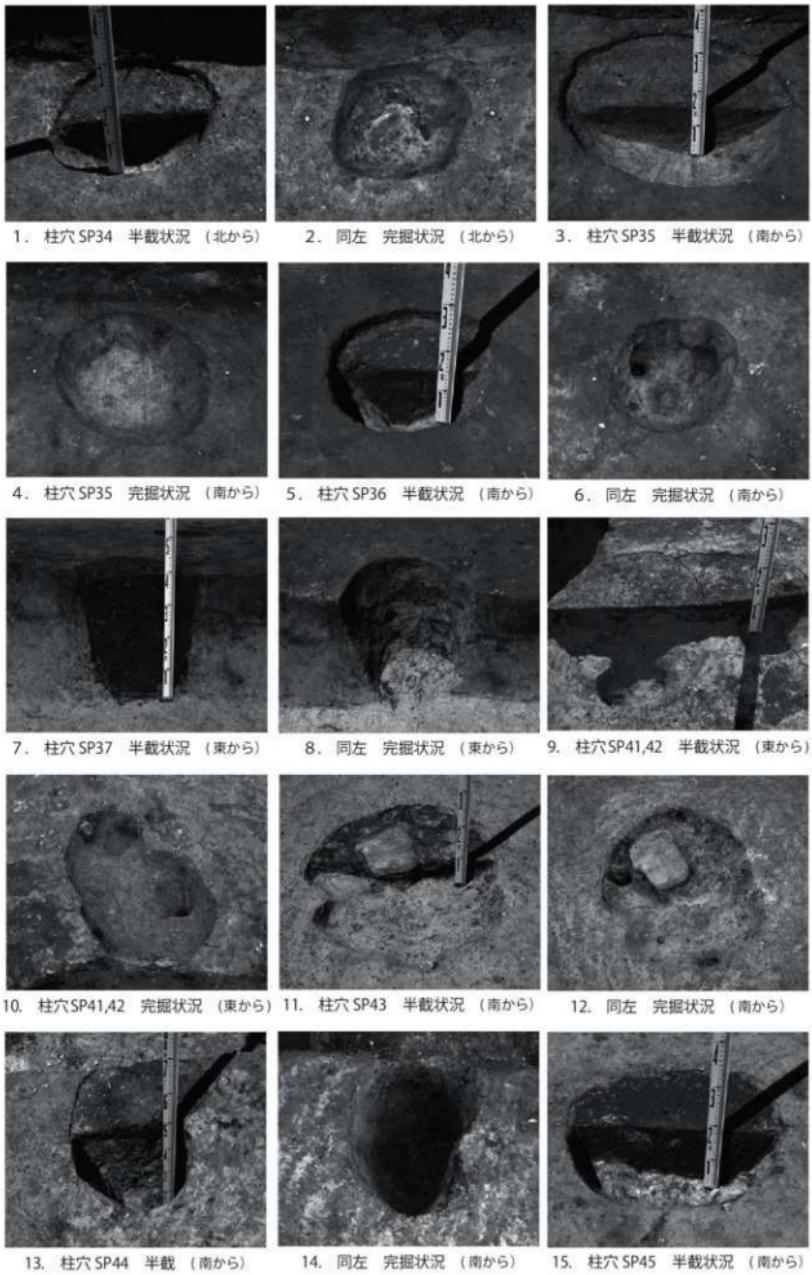
図版 12

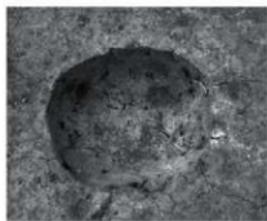


図版13



図版 14





1. 柱穴 SP45 完掘状況 (南から)



2. 柱穴 SP46 半截状況 (南から)



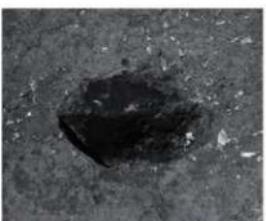
3. 同左 完掘状況 (南から)



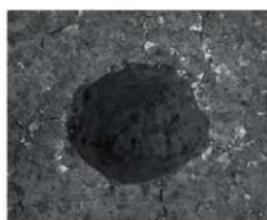
4. 柱穴 SP47 半截状況 (南から)



5. 同左 完掘状況 (南から)



6. 柱穴 SP48 半截状況 (南から)



7. 柱穴 SP48 完掘状況 (南から)



8. 柱穴 SP49 半截状況 (南から)



9. 同左 完掘状況 (南から)



10. 2区 完掘状況 (北から)

図版 16



1. 2区南端部 遺構検出状況（北東から）



2. 同上 完掘状況（北東から）

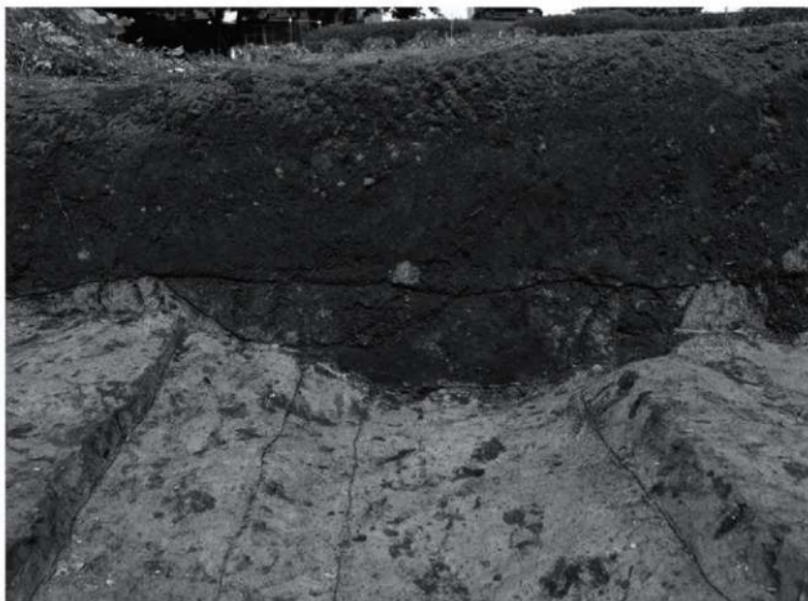


1. 溝状遺構 SD01、SD02 検出状況（東から）



2. 同上 完掘状況（東から）

図版 18



1. 溝状遺構 SD01、SD02 土層堆積状況（東から）



2. 溝状遺構 SD03 完掘状況（東から）



1. 不整形土坑 SX01 ~ 03 検出状況（東から）



2. 同上 完掘状況（東から）

図版 20



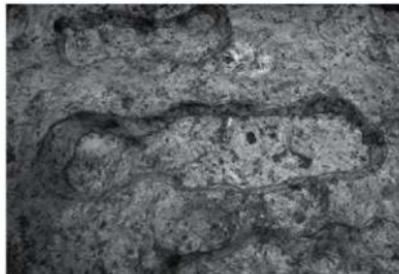
1. 不整形土坑 SX01 半截状況（南から）



2. 同左 完掘状況（東から）



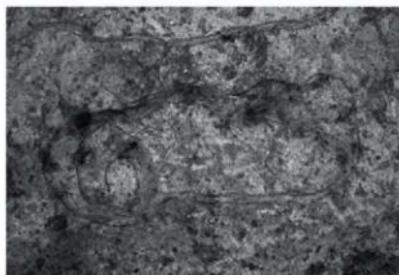
3. 不整形土坑 SX02 半截状況（南から）



4. 同左 完掘状況（東から）



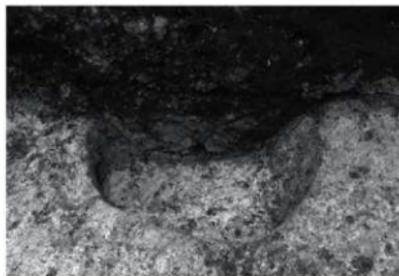
5. 不整形土坑 SX03 半截状況（南から）



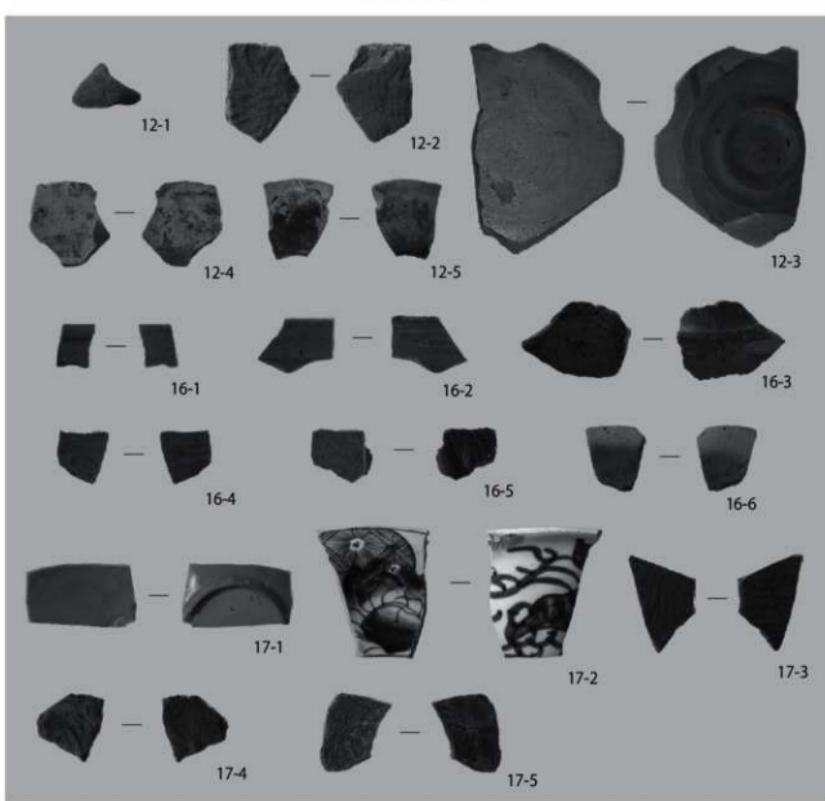
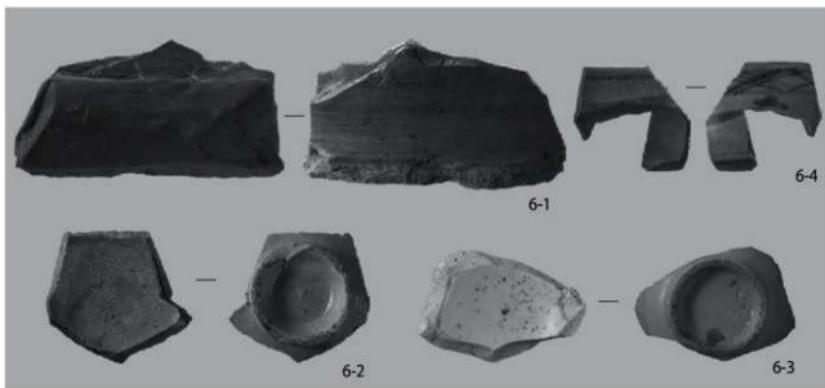
6. 同左 完掘状況（東から）



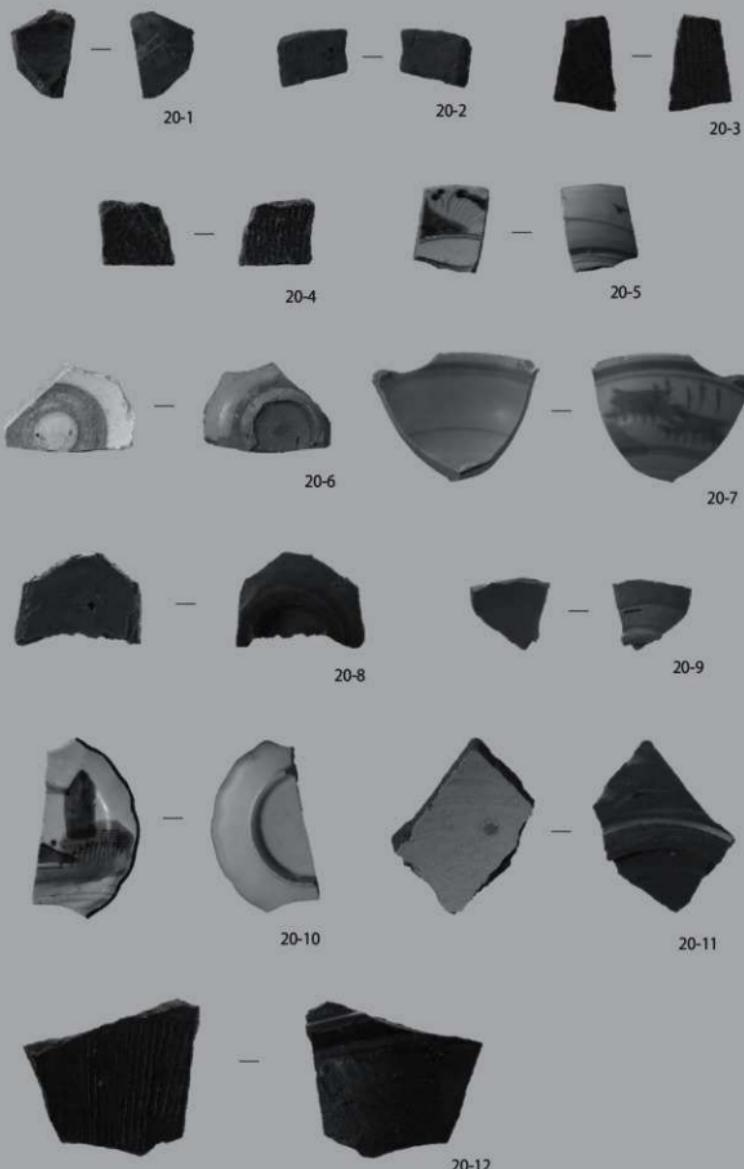
7. 柱穴 SP50 完掘状況（東から）



8. 柱穴 SP51 完掘状況（東から）



図版22



2区 出土遺物

# 報告書抄録

| ふりがな              | しもくろだいせき   |                      |                        |              |   |                     |        |  |  |
|-------------------|--|----------------------|------------------------|--------------|---|---------------------|--------|--|--|
| 書名                | 下黒田遺跡  |                      |                        |              |   |                     |        |  |  |
| 副書名               | 大庭宅地造成工事に伴う発掘調査報告書   |                      |                        |              |   |                     |        |  |  |
| 卷次                | 2  |                      |                        |              |   |                     |        |  |  |
| シリーズ名             | 松江市文化財調査報告書  |                      |                        |              |   |                     |        |  |  |
| シリーズ番号            | 第208集  |                      |                        |              |   |                     |        |  |  |
| 編著者名              | 徳永 隆、建神結香子、小山泰生（編集）  |                      |                        |              |   |                     |        |  |  |
| 編集機関<br>所在地       | 松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室<br>〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL: 0852-55-5284  |                      |                        |              |   |                     |        |  |  |
|                   | 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 埋蔵文化財課<br>〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL: 0852-85-9210 |                      |                        |              |   |                     |        |  |  |
| 発行年月日             | 令和4（2022）年3月   |                      |                        |              |   |                     |        |  |  |
| 所取遺跡名             | 所在地  | コード                  |                        | 北緯           | 調査期間  | 調査面積                | 調査原因   |  |  |
|                   |  | 市町村                  | 遺跡番号                   | 東経           |   |                     |        |  |  |
| しもくろだいせき<br>下黒田遺跡 | しまねけんさつこうし<br>島根県松江市<br>大庭町<br>52番地5外  | 32201                | D-016                  | 35° 43' 14"  | 20210401<br>～<br>20210630   | 398.2m <sup>2</sup> | 宅地造成工事 |  |  |
|                   |  |                      |                        | 133° 08' 80" |   |                     |        |  |  |
| 所取遺跡名             | 種別   | 主な時代                 | 主な遺構                   | 主な遺物         | 特記事項  |                     |        |  |  |
| 下黒田遺跡             | 集落跡  | 奈良時代<br>平安時代<br>江戸時代 | 掘立柱建物<br>土坑<br>柱穴<br>溝 | 須恵器<br>陶磁器   | 古代の掘立柱建物跡と近世の掘立柱建物跡及び井戸跡を検出した。また、古代山陰道の推定線上に道路側溝である可能性が高い溝跡を検出した。 |                     |        |  |  |

松江市文化財調査報告書 第208集

大庭宅地造成工事に伴う発掘調査報告書

## 下黒田遺跡2

令和4(2022)年3月

編集・発行 島根県松江市  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財团

印 刷 有限会社 黒潮社  
島根県松江市向島町182-3